

北屋敷古墳群

(第2地点第2次)

—車両置き場造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022

水戸市教育委員会

北屋敷古墳群

(第2地点第2次)

—車両置き場造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022

水戸市教育委員会

ごあいさつ

周知の埋蔵文化財包蔵地「北屋敷古墳群」は、那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しています。本遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」のほか、6世紀後半から11世紀前半まで営まれた大集落である東前原遺跡、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡、那賀郡衛正倉別院と平津駅家の機能が複合したと考えられている大串遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

埋蔵文化財はその性格上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と原状に復すことができないため、私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならない貴重な財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調和を図りながら、文化財の保護・保存に努めているところです。

この度、本遺跡内において車両置き場造成工事が計画され、保存について事業者にご理解をいただき記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。調査の結果、北屋敷古墳群第2号墳の墳丘規模や築成過程が明確になるとともに、墳丘上に樹立されていたと考えられる円筒埴輪が出土するなど貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端の復元や貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚、郷土愛の醸成へ繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査の実施に際し、多大なる御理解と御協力を賜りました事業者様、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

令和4年12月

水戸市教育委員会

教育長 志 田 晴 美

例 言

1. 本書は、水戸市大串町内における車両置き場造成工事に伴い実施した、北屋敷古墳群第2地点第2次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は小野寺和喜代から委託を受けた株式会社ラクロが、水戸市教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 調査概要及び調査組織は以下の通りである。

所在地 茨城県水戸市大串町字北ノ屋敷 744 番 1
調査面積 約 455 m²
調査期間 令和4年9月26日～令和4年9月30日
4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査主体 志田晴美（水戸市教育委員会教育長）
調査担当 小久顕治 金川真也（株式会社ラクロ）
事務局
小川邦明（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長）
川口武彦（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター所長）
米川暢敬（同調査係長）
新垣清貴（同主幹）
廣松滉一（同文化財主事）
丸山優香里（同文化財主事）
栗原秀英（同会計年度任用職員 埋蔵文化財専門員）
有田洋子（同会計年度任用職員 公開活用担当）
昆 志穂（同会計年度任用職員 庶務担当）
5. 調査参加者
（発掘調査）大内 敬 三浦一鷹 皆川幸子
（整理作業）飯塚恵津子 岩田真由美 對馬むつみ 峯 瑞穂 村山彩子
6. 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、一括して水戸市埋蔵文化財センター（大串貝塚ふれあい公園）にて保管している。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。

記して深く謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。
井 博幸 稲田健一 横地和治 檜村宣行 小林孝秀 蓼沼香未由 谷仲俊雄 吉原作平
茨城県教育庁総務企画部文化課 公益財団法人茨城県教育財団埋文企画管理課
タクミテックサーベイ株式会社

凡 例

1. 測量は世界測地系座標を用い、挿図中の方位は座標北を示す。
2. 挿図中で使用した遺構の略記号は以下を示す。
TM：古墳 K：攪乱
3. 土層及び断面図に記した数値は標高を示す。
遺構の形態・規模は基本的に現状の掘削した状態で判断した。計測は壁上端で行った。
深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置まで測り、遺構内施設の深さは床・底面の位置から計測している。
4. 掲載した図面の縮尺は、原則として以下の通りである。
調査区全体図 1／200 遺構平面図・断面図 1／200・1／60 遺物図 1／3
5. 遺構の土層及び遺物の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
6. 遺物観察表に付した（ ）は復元値，<>は残存値として表す。遺物の計測値は規模を「cm」、重量を「g」で表した。
7. 遺構図における土層説明で、微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を4区分したものであり、それぞれ、微量は1%以上～5%未満，少量は5%以上～15%未満，中量は15%以上～30%未満，多量は30%以上を示す。粒子は20mm未満，ブロックは20mm以上を示す。
8. 遺物番号は本文，挿図，写真図版と一致する。
9. 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンおよび記号は、以下に示すとおりである。
攪乱 [] 推定線 [] 削平部・鹿沼軽石層 [] 繊維 []
10. 本遺跡の略号は201-249・2である。遺物の注記もこれに従っている。

目 次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と調査方法	2
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 北屋敷古墳群とその周辺における既往の発掘調査	6
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 検出された遺構と遺物	11
(1) 2号墳	11
(2) 遺構外出土遺物	16
第4章 総括	19
第1節 調査成果	19
第2節 北屋敷古墳群第2号墳の墳形について	19
参考文献	
写真図版	
報告書抄録・奥付	

挿図目次

第 1 図	北屋敷古墳群第 2 地点試掘調査（第 1 次）トレンチ配置図…………… 2	第 7 図	2 号墳…………… 13
第 2 図	北屋敷古墳群第 2 地点と周辺の遺跡位置…………… 4	第 8 図	2 号墳出土遺物（1）…………… 14
第 3 図	北屋敷古墳群・北屋敷遺跡調査地点位置図…………… 6	第 9 図	2 号墳出土遺物（2）…………… 15
第 4 図	北屋敷古墳群第 1 地点の遺構配置と第 2 号墳の墳丘測量図…………… 7	第 10 図	遺構外出土遺物（1）…………… 16
第 5 図	北屋敷古墳群の主な出土遺物…………… 8	第 11 図	遺構外出土遺物（2）…………… 17
第 6 図	全体図…………… 12	第 12 図	墳形の復元案①…………… 20
		第 13 図	北屋敷古墳群第 2 号墳の埴輪集中 A～D の出土状況…………… 22
		第 14 図	墳形の復元案②…………… 24

挿表目次

第 1 表	北屋敷古墳群と周辺遺跡一覧…………… 5	第 4 表	遺構外出土土器属性一覧…………… 18
第 2 表	北屋敷古墳群・北屋敷遺跡における既往の調査…………… 10	第 5 表	遺物集計表…………… 18
第 3 表	2 号墳出土埴輪属性一覧…………… 16	第 6 表	水戸市域における埴輪を伴う円墳… 21

写真図版目次

図版 1	2 号墳土層断面 A-A' 東から 2 号墳土層断面 A-A' 南から
図版 2	2 号墳土層断面 A-A' 北から 2 号墳墳丘中央部土層断面 東から 2 号墳北側周溝土層断面 東から 2 号墳南側周溝土層断面 東から 削平部南側残存周溝トレンチ土層断面 B-B' 東から
図版 3	2 号墳出土遺物 1～8
図版 4	2 号墳出土遺物 9～16
図版 5	遺構外出土遺物 1～8
図版 6	遺構外出土遺物 9～16
図版 7	遺構外出土遺物 17・18

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

令和4年7月5日に水戸市庁内課から周知の埋蔵文化財包蔵地「北屋敷遺跡」及び「北屋敷古墳群」において土木工事が行われているとの連絡があり、水戸市埋蔵文化財センターは、文化財保護法に基づく適正な手続きを経ずに行われていることを確認した。その後、水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）は、工事主体者である小野寺 和喜代（以下「事業者」という。）に対し、書面により、開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「北屋敷遺跡」及び「北屋敷古墳群」に該当しており、工事着手60日前までに茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて文化財保護法第93条に基づく届出を提出する必要がある旨を通知した。その後、令和4年7月16日付けで、車両置き場造成工事に伴い、事業者から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」及び顛末書が提出された。

これに対し、市教委は開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「北屋敷遺跡」及び「北屋敷古墳群」に該当しており、工事着手60日前までに県教委教育長あて文化財保護法第93条に基づく届出を提出する必要があること、遺跡の発掘調査を必要とする場合には原因者の協力をお願いする旨を回答した（令和4年7月26日付け・教理第328号）。

その後、事業者からの依頼を受け令和4年8月4日・5日に試掘調査を実施した。調査区は、申請地の中央部に幅1.5m×長さ20.0mのトレンチを3本（トレンチ①～③）、幅1.5m×長さ9.0mのトレンチを1本（トレンチ④）設定し、バックホーにより表土を除去し、以後は人力で精査を行った（第1図）。また、申請地の西側に残存する2号墳の土層断面の精査も併せて行った。トレンチ①～③は関東ローム層下の礫層まで削平が及んでおり、遺構及びそれに伴う遺物は確認されなかった。トレンチ④では地表下45～115cmで関東ローム層上面が検出されたが、東側においては関東ローム層下の礫層まで削平が及んでおり、遺構及びそれに伴う遺物は確認されなかった。

残存している2号墳の墳丘の土層断面を観察した結果、旧表土を水平に整地し、その上に厚さ約1.6mのロームブロックを主体とする築成土が積まれ、北東部で旧表土とほぼ同じ高さに埋葬施設の一部の可能性のある石材が露出している状況を確認することができた。また、2号墳の周囲に巡っている周溝の一部については、墳丘の西側断面で確認された。2号墳の墳丘上、断面及び周溝内からは多数の円筒埴輪片のほか、古墳時代の土師器片、縄文時代土器片、奈良・平安時代の須恵器甕の破片などが採集された。

調査区内に2号墳の墳丘が残存しており、遺物も採集されたことから、市教委は現状保存に向け事業者と協議を重ねたが工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第93条第1項に基づく届出について、記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して、県教委教育長あて進達した（令和4年8月16日付け教理第330号）。この通知に対し、県教委教育長から令和4年8月25日付け文第1628号にて、工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果、重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、市教委は工事対象地のうち、墳丘や周溝が残存し、今後崩落等の危険性がある面積約455㎡を調査対象とし令和4年9月26日～令和4年10月1日の期間に株式会社ラクロの支援を受けて記録保存を目的とした本発掘調査（墳丘測量及び土層断面記録）を実施することとした。（川口）



第1図 北屋敷古墳群第2地点試掘調査（第1次）トレンチ配置図（S=1/1,500）

第2節 発掘調査の経過と調査方法

発掘調査は、令和4年9月26日から同年9月30日まで実施した。9月26日より削平され露出した古墳断面の精査および現況の測量を行った。27日に現況の測量は終了して、28日には周溝やその他の遺構などの確認トレンチ調査を実施した。29日には全体の清掃作業や写真撮影を行い、30日にトレンチの埋め戻し作業と並行して、露出した古墳壁面の養生作業を行い発掘作業は完了した。

遺構平面図は光波測量機を用い、原則として公共座標（世界測地系）に基づいた3次元で記録した。また遺構の断面図等の実測は縮尺1/20を原則とした。記録写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ（2400万画素）を用い、データはJPEG形式およびRAW形式で記録・保存した。（金川）

第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和4年10月から12月まで行った。10月からデータの整理、遺物洗浄、注記、接合作業と並行して、写真整理、遺構図の編集を行い、11月には遺物の実測や遺構や遺物のトレース作業、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆作業などを進め、12月に報告書編集作業を行った。その後、校正を重ね、令和4年12月26日に報告書を刊行した。（対馬）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

北屋敷古墳群は、水戸市の南東部、那珂川右岸台地上で、那珂川とその支流により形成された沖積地に囲まれた、東へと張り出す東茨城台地東端の標高16m前後の台地縁辺部に立地する。現況は宅地や山林である。東西約150m、南北約50mの範囲が周知されている。そのうち今回調査対象となる第2号墳は、北屋敷古墳群の東側、水戸市大串町字北ノ屋敷744番1他に所在する。(金川)

第2節 歴史的環境

北屋敷古墳群が立地する東茨城台地の東端部には、旧石器時代から近世に至るまで、多くの遺跡が点在している。北屋敷古墳群周辺遺跡では、旧石器時代の痕跡は少ないが森戸古墳群の第12号墳(大六天古墳)の調査でチャート製やメノウ製の石器群が出土している。縄文時代の遺跡には、著名な大串貝塚がある。大串貝塚は『常陸國風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに知られる前期貝塚で、一部が国指定史跡となっており、その内容は質・量ともに茨城県下で該期の貝塚を代表するものである。次いで中期では下畑遺跡で、加曽利E式、大木8b式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が検出され、複式炉を有する建物跡が検出されている。続く弥生時代では、生活の痕跡は他時期に比して低調であり調査例は少ない。後期に至り、丘陵沿いの台地上や縁辺部に立地する小原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物のみが検出されているにとどまる。古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群など、台地縁辺部の沖積地より見上げる高台の位置に古墳が活発に築造されるようになる。集落の分布としては、前期の集落が大串遺跡、後期の集落としては梶内遺跡などの調査例がある。台地上において活発な土地利用がみとれる一方で、中期の調査例は乏しく土地利用が緩慢であった。奈良・平安時代では、律令体制下における地方末端支配を目的とした郡衙及び郡寺の造営が、渡里町に所在する国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」を中心に垣間見ることができる。水戸市は全域が常陸国那賀郡域内にあり、本跡周辺は同郡芳賀里(郷)に比定される。大串遺跡第7地点における調査では、断面V字状を呈する大溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が検出されている。また、束柱を有し、壺地業がなされた桁行6間×梁行3間の大型掘立柱建物跡なども確認されており、一般集落とは様相を異にする官衙的な色彩の強い遺構が検出されている。大型の掘立柱建物跡の柱抜き取り穴からは多量の炭化材と共に炭化した穎稻や穀稻が出土している。また、「厨」銘墨書土器なども出土している。建物が正倉として機能しており、那賀郡内に設置された正倉別院であった可能性が指摘されている。梶内遺跡は、7世紀から10世紀まで、断続的にはあるが長期にわたり継続した集落として注目される。梶内遺跡では「舎人」「長」、郷名を記したとみられる「芳」銘墨書土器や9点もの円面硯が出土しており、官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。これらの遺跡群からは、『常陸國風土記』那賀郡条の「平津驛家西 一二里有岡名曰大櫛」の記事とあわせ、周辺地域が常陸国那賀郡芳賀郷の中心的な地域であったことが窺える。中世に至り、旧常澄村域と重なる恒富郷を本拠としたのは、常陸平氏大掾氏の一流である石川氏である。該期の周辺遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡などがみられる。いずれの城館跡も土塁が報告されているが、調査例が少なく、その全容については不明瞭な点が多い。近世には、水戸城下の外縁部に該当している。該期の溝跡や土坑などが各遺跡で散見される。また、『新編常陸国誌』などには立原伊豆守の居所と記される伊豆屋敷跡では調査が実施され、3条の土塁と1条の溝跡が検出されている。本遺跡周辺

では、近年、急速に宅地開発が進められている。そのため各時代の遺跡の調査事例が多く報告されており、周辺地域の様相がより明らかとなりつつある地域である。(金川)



第2図 北屋敷古墳群第2地点と周辺の遺跡位置 (茨城県遺跡地図 1/25,000「水戸」に加筆)

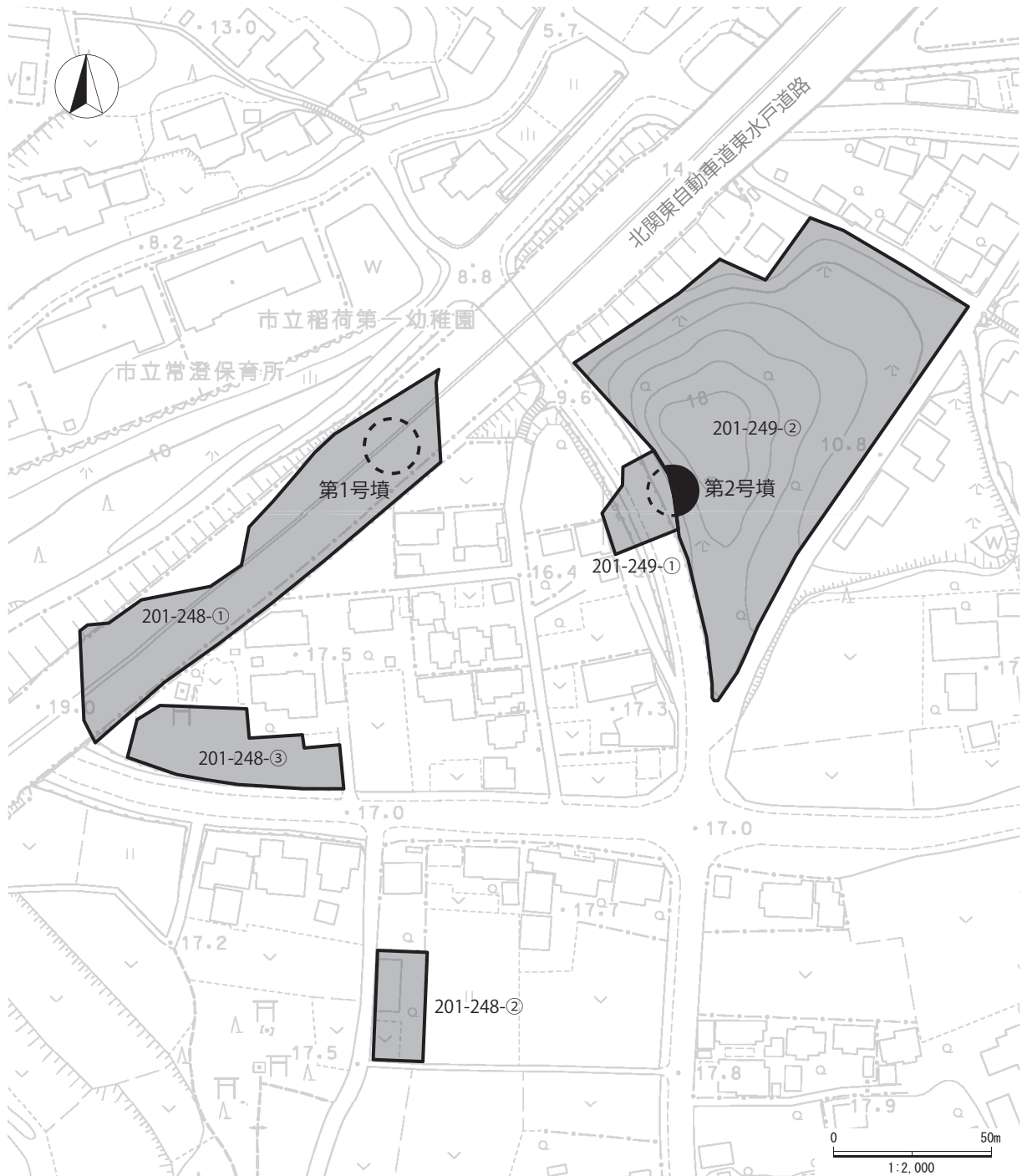
第1表 北屋敷古墳群と周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代・時期							遺跡番号	遺跡名	時代・時期						
		旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
201-053	西大野遺跡			○	○				201-242	高原古墳群				○			
201-054	東大野遺跡				○	○			201-243	小山遺跡		○					
201-140	乗越沢遺跡		○		○	○			201-244	諏訪前遺跡					○		
201-143	中大野遺跡			○	○				201-245	沢幡遺跡					○		
201-175	大串貝塚		○						201-246	梶内遺跡				○	○		
201-176	大串遺跡		○		○	○			201-247	高原遺跡			○		○		
201-177	森戸遺跡	○							201-248	北屋敷遺跡				○	○		
201-178	向山遺跡		○	○	○				201-249	北屋敷古墳群				○			
201-179	東前遺跡		○		○				201-250	六反田古墳群				○			
201-181	六地藏寺遺跡			○	○	○			201-251	伊豆屋敷跡							○
201-183	小原遺跡			○	○	○			201-252	上野遺跡					○		
201-184	新地遺跡				○	○			201-253	佛性寺古墳				○			
201-185	薄内遺跡		○		○	○			201-254	フジヤマ古墳				○			
201-186	金山塚古墳群				○				201-256	諏訪神社古墳				○			
201-187	大串古墳群				○				201-257	千勝神社古墳				○			
201-189	愛宕神社古墳				○				201-258	打越遺跡					○		
201-190	六地藏古墳				○				201-259	東前原遺跡				○	○		
201-191	小山古墳群				○				201-260	住吉神社古墳				○			
201-192	森戸古墳群				○				201-261	大串原館跡						○	
201-193	上平遺跡				○	○			201-262	大串原遺跡					○		
201-194	長福寺古墳群				○				201-263	宮前遺跡					○		
201-195	涸沼台古墳群				○				201-264	東畑古墳				○			
201-197	善徳寺古墳				○				201-267	天神山古墳				○			
201-201	椿山館跡						○		201-268	久保山館跡						○	
201-202	和平館跡						○		201-279	道西遺跡		○	○	○	○		
201-203	六反田広町遺跡				○				201-299	上の下遺跡					○		
201-237	野中遺跡			○	○				201-300	天神山遺跡				○	○		
201-238	坏大野遺跡			○					201-307	山崎遺跡					○		
201-239	中ノ割遺跡		○			○											

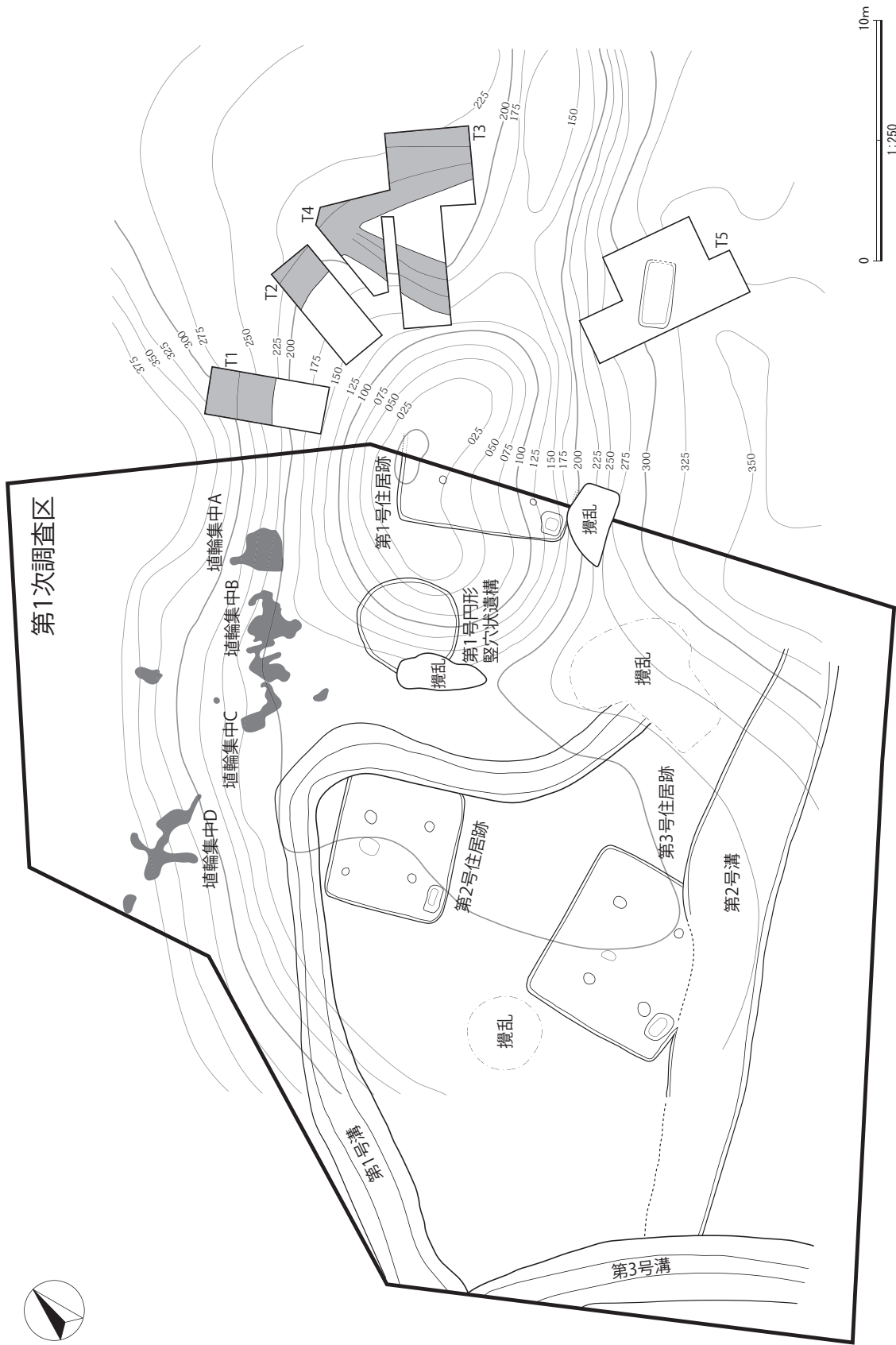
第3節 北屋敷古墳群とその周辺における既往の発掘調査

周知の埋蔵文化財包蔵地「北屋敷古墳群」ではこれまで2地点において発掘調査が行われている（第3図）。

第1地点は、平成6年度に実施した市道常澄6-0008号線敷設に伴う北屋敷古墳群第2号墳の調査地点である（井上・千葉 1995）。本調査では、第2号墳の墳丘西側で周溝が確認できなかったことから墳形は確定しなかったものの、第2号墳に先行して営まれていた弥生時代後期の竪穴状遺構1基や古墳時代前期の竪穴建物跡3軒のほか、近世以降の溝状遺構3条、近代の防空壕などが検出されるとと

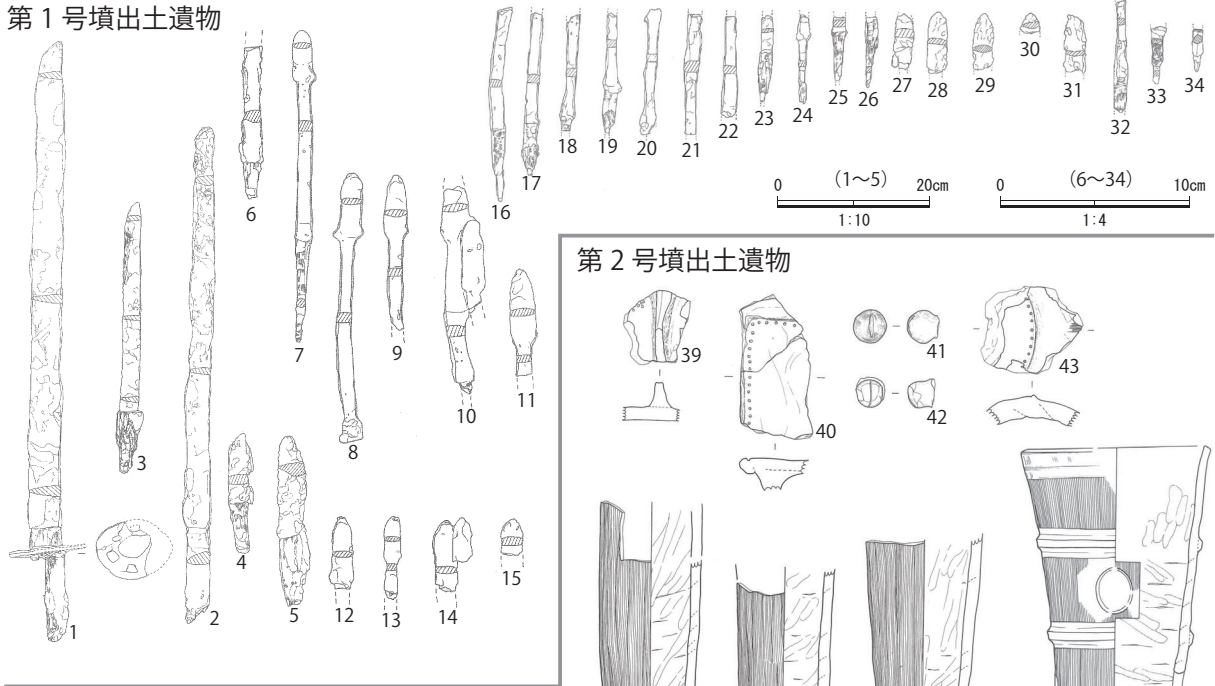


第3図 北屋敷古墳群・北屋敷遺跡調査地点位置図 (S=1/2,000)

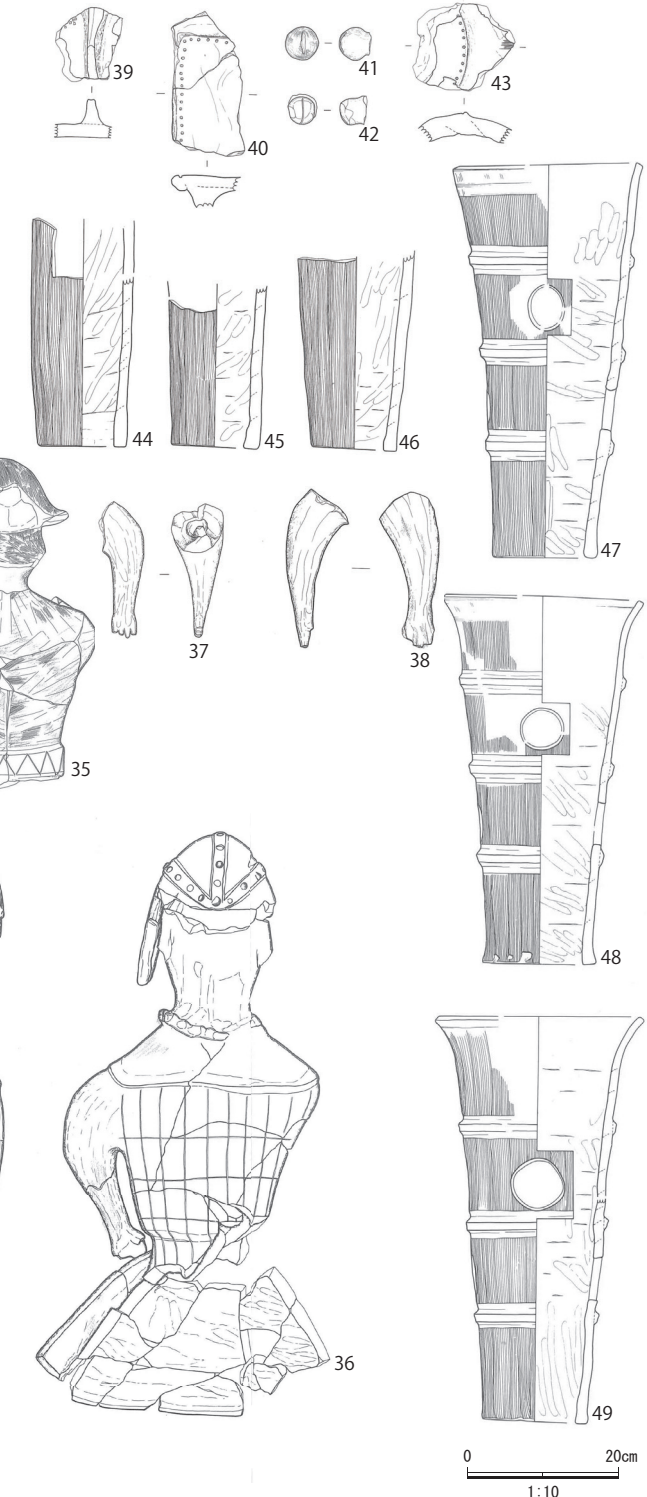


第4図 北屋敷古墳群第1地点の遺構配置と第2号墳の墳丘測量図 (S=1/250)

第1号墳出土遺物



第2号墳出土遺物



第5図 北屋敷古墳群の主な出土遺物 (梶山 1993, 井上・千葉 1995 より転載・加筆)

もに、2号墳に樹立されていたと考えられる円筒埴輪や形象埴輪の集中部が墳丘の北西側において検出された(第5図)。出土した普通円筒埴輪は3条4段構成のもので、突帯は低平で台形に近い形となっており、透しは円形で3段目に穿たれるものが多かった(第5図-47～49)。形象埴輪には人物(第5図-35～38)のほか、馬もみられた(第5図-39～46)。人物埴輪の腕の製作技法に注目すると、6世紀第2四半期に位置づけられる玉里舟塚古墳(佐々木・忽那・小澤・佐々木・上條 2015)出土の人物埴輪に認められる、棒状の粘土から手・前腕の部分までを中実で作出し、これに粘土紐巻きで製作した円筒形の上腕部と接合させる「中空B技法¹⁾(粘土紐巻き+中実)」(黒澤 2010・大村 2012)による製品が認められる(第5図-37)。また、人物埴輪の中でも灰色系顔料を胴部に着色した人物埴輪の存在は注目される(第5図-35・36)。特に武装男子は分離造形による製品で(黒澤 2010, 大村 2012)、良好な状態で出土し、水戸市の指定文化財(考古資料)に指定されている。本資料の顔面と腕・鋳・挂甲などには顔料塗布による鈍色の彩色が残っており、こうした彩色のある埴輪は県北地域に多くみられることから、埴輪製作者集団の移動や埴輪製作遺跡から古墳への供給関係を考えるうえで貴重な資料である。これら一連の埴輪群の技術的・形態的特徴から第2号墳は6世紀前葉～中葉頃にかけて築造されたと理解されている(黒澤 2010, 稲村 2019)。

「北屋敷古墳群」の範囲に重複する形で展開する「北屋敷遺跡」では3地点において発掘調査が行われており(第3図)、平成3年度に一般国道6号東水戸道路改築工事に伴い財団法人茨城県教育財団が調査した第1地点では、1基の円墳が確認されている。本古墳は記録保存により湮滅したが、北屋敷古墳群第1号墳として整理している。

北屋敷古墳群第1号墳は、墳丘は失われていたものの、周溝が残存しており、内径13.6m、外径18.6mであった(梶山 1993)。また、周溝の内側の中央からやや南東寄りの位置にはN-5°-Eに主軸方向を持つ横穴式石室が構築されていた。調査報告によると、掘り方は遺構確認面で南北4.9m、東西3.31m、深さ約0.76mで、底面は南北4.68m、東西2.76mであった。掘り方と横穴式石室の間にはローム粒子や粘土ブロックを含み硬く締まった褐色土と黒色土層とにぶい橙色の粘土層が交互に裏込めされていた。横穴式石室は凝灰岩の切石積みによる無袖形の単室構造のもので、寸法は外法で長さ約3.9m、幅約1.8m、内法で長さ約3.67m、幅約0.83m、高さ約0.72mであった。石室内からは鉄製の大刀(第5図-1・2)のほか、刀子(第5図-3～5)、鉄鏃(第5図-6～34)が出土した。鉄鏃の中には棘状関を持つものが3点含まれている(第5図-7～10)。この形状のものはTK43以後に出現するもので²⁾、箕浦 絢氏による古墳副葬鉄鏃分類の横刃柳葉C2式(箕浦 2021)に相当するものである。横刃柳葉C2式は箕浦氏の変遷案ではⅢ-1期(6世紀後葉)に位置づけられている。また、周溝から埴輪が1点も出土していないことも考慮すると、第1号墳は6世紀末葉～7世紀初頭頃にかけて築造されたと理解して良さそうである。

個人住宅建築に伴い平成18年度に実施した北屋敷遺跡第2地点の調査では、遺構は確認されなかったものの、奈良・平安時代の土師器・須恵器片、近世の瓦質土器・磁器片が少量出土した(川口・色川編 2009)。

共同住宅建築に伴い平成29年度に実施した北屋敷遺跡第3地点の調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒、古墳時代以降の竪穴建物跡1軒、溝跡2条、土坑1基、性格不明遺構2基が検出されるとともに古墳時代、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土した。(川口)

第2表 北屋敷古墳群・北屋敷遺跡における既往の調査

遺跡名	地点	次数	所在地	調査原因	調査期間	種別	遺構	遺物	備考
北屋敷古墳群 201-249	1	—	大串町字北ノ屋敷 744-5	市道常澄 6-0008 号線敷設	H6. 3. 15 ~ 4. 27	本	○	○	井上・千葉 1995
	2	1	大串町字北ノ屋敷 744-1	車両置き場	R4. 8. 4 ~ 8. 5	試	○	○	
		2			R4. 9. 26 ~ 9. 30	本	○	○	本報告
北屋敷古墳群 201-248	1	—	大串町 765 ほか	一般国道 6 号線東 水戸道路改築工事	H3. 6. 11 ~ 12. 19	本	○	○	梶山 1993
	2	—	大串町 734-5	個人住宅	H18. 11. 15	試	—	○	
	3	—	大串町 766-1, 768-5	共同住宅	H29. 11. 24 ~ 11. 30	試	○	○	

註

- 1) 大村冬樹氏は、北屋敷古墳群第2号墳出土の人物埴輪の腕の製作技法を上腕部は中空B技法と同様に粘土紐を巻き上げて製作する点は共通するものの、より長い中実の前腕部が差し込まれる点で「中空C技法」として細分されている（大村 2012）。
- 2) 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査事務所の稲田健一氏の御教示による。

【引用・参考文献】

- 稲村 繁 2019 「附章 戸ノ内古墳出土の埴輪について」『戸ノ内遺跡・戸ノ内古墳発掘調査報告書』東海村教育委員会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳市道常澄 6-0008 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 大村冬樹 2012 「人物埴輪の製作技法からみた古墳時代後期の常陸」『筑波大学先史学・考古学研究』第23号 筑波大学歴史人類学系
- 梶山雅彦 1993 「第10章 北屋敷遺跡」『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 I 中ノ割遺跡 小山遺跡 諏訪前遺跡 高原古墳群 沢幡遺跡 高原遺跡 北屋敷遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦・色川順子編 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 黒澤彰哉 2010 「腕の製作技法と顔の作風から見た茨城の人物埴輪」『茨城県立歴史館報』第37号 茨城県立歴史館
- 佐々木憲一・忽那敬三・小澤重雄・佐々木泰子・上條朝宏 2015 『舟塚古墳 埴輪編 舟塚古墳整理事業』茨城県教育委員会
- 箕浦 絢 2021 「関東における古墳副葬鉄鏃の変遷」『駿台史学』第171号 駿台史学会

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の発掘調査は北屋敷古墳群第2号墳の墳丘の東側が削平により失われ、墳丘断面が露出してしまっている状況にあることから、残存している墳丘及び周辺地形の測量を中心に、旧表土・周溝・墳丘の関係を明瞭にするため土層断面の観察を実施した。出土遺物は収納箱で1箱（整理箱容量：縦54cm×横34cm×深さ15cm）、総点数272点、総重量で7943.5gである。調査面積は455㎡である。表土中に含まれる遺物は少なく細片がほとんどを占める。古墳に伴うとみられる円筒埴輪を主に、他にいずれも少量だが縄文時代前期浮島式土器、弥生時代後期の土器、古墳時代前期から中期の土師器、中世の内耳鍋、近現代のものとみられる土製人形などが出土している。（小久）

第2節 検出された遺構と遺物

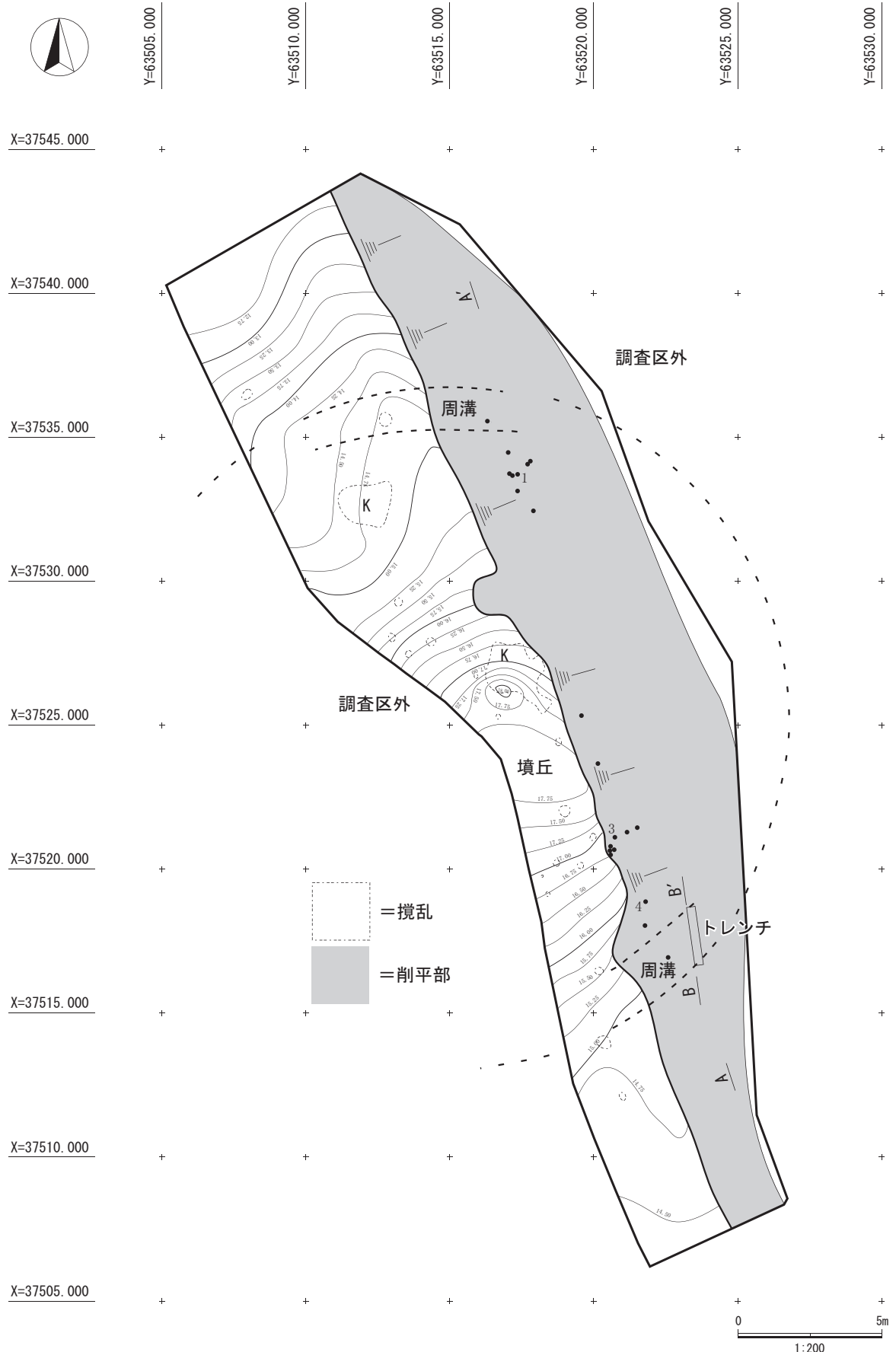
（1）2号墳（第6～9図，第3表，図版1～4）

北屋敷古墳群2号墳はこれまでのところ墳形は明らかとなっていないが、今回の東側の削平された部分は円墳あるいは前方後円墳の後円部の可能性がある。後述する今回確認された周溝部を含めると円形部の40%が失われたこととなる。周溝部を含む径はおよそ24mとみられ、高さ3.5m程と想定される。墳丘表面には木根などの攪乱が多くみられる。墳頂平坦面は狭く、頂部北側に小さな高まりがみられることから小祠があった可能性が指摘される。

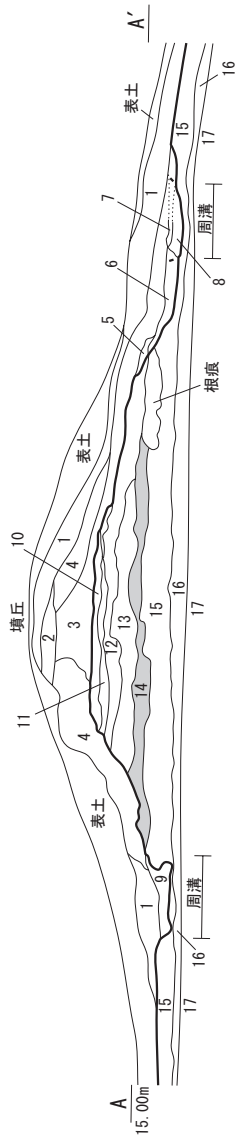
周溝は断面にて確認されたが、削平部は深く削られており、南北の一部でその痕跡をわずかに検出したにとどまる。土層断面南側で上幅2.3m、下幅1.7m、深さ0.5m、土層断面北側では一部攪乱を受け失われていたが推定で上幅2.3m、下幅1.6m、深さ0.45m、削平部の南側では上幅2.0m、下幅1.8m、深さ0.3mを測る。壁が崩落しているものとみられるが、断面形は逆台形をしていたものと想定される。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする。出土遺物は混入したものとみられる古墳時代前半の土師器甕の細片1点が出土している。

墳丘部も断面でみると崩落が進んでおり、外縁部の表土層が厚く堆積している。盛り土とみられる2層では鹿沼軽石ブロックが確認されることから、墳丘構築時に掘り込まれた周溝の廃土を盛っているものとみられる。墳丘中央部の中位で10層以下の地山層を検出していることから、一部自然地形を利用し、地山を削り出した上に盛り土で墳丘を構築している可能性が指摘される。土層断面での墳丘部の幅は15m程で、復元径は20mに達するものとみられる。墳丘周辺や削平部からは古墳に伴う円筒埴輪片が194点、5909.5g出土している。他にいずれも少量ではあるが古墳時代前期から中期の土師器52点、813.9g、須恵器2点、286.5g、縄文土器16点、285.9g、弥生土器2点、18.3g、中世内耳鍋1点、70.5g、土製人形1点、469.5g、礫4点、89.4gが出土している。一部削平部より出土した遺物の出土位置を記録しているが削平時に攪乱され原位置は保っていないものと考えられる。

このうち古墳に伴う円筒埴輪を破片ではあるが16点図示している（第8・9図）。破片は口縁部、体部、底部のものがあり、突帯部や円形透孔がみられる。突帯は低平で台形に近い形状をしたもので占められる。また厚手のものと薄手で堅緻なものが含まれる。破片資料のため形態が不明瞭であるが、既往の調査でも明らかとなっている口縁部が外反するものと外傾するものが含まれている。（小久）

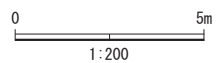


第6図 全体図



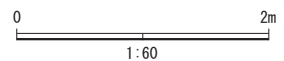
2号墳

- 1 10YR4/4 褐色土 やや粘性をもち、やや締まる。
- 2 10YR8/6 黄橙色土 粘性に欠け、やや締まる。1～5cm程度の鹿沼ブロックを多量に含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 やや粘性をもち、やや締まる。荒い盛土層。ローム粒子・ロームブロックを中量含む。
- 4 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性をもち、やや締まる。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
- 5 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性をもち、締まる。
- 6 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性をもち、締まる。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
- 7 10YR3/2 黒褐色土 粘性をもち、締まる。(周溝北側)
- 8 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性をもち、締まる。(周溝北側)
- 9 10YR3/3 暗褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。(周溝南側)
- 10 10YR3/2 黒褐色土 やや粘性をもち、締まる。ローム粒子を微量含む。(旧表土層)
- 11 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性をもち、締まる。(ローム漸位層)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性をもち、締まる。(ソフトローム層)
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性をもち、締まりが強い。(ハードローム層)
- 14 10YR8/6 黄橙色土 やや粘性をもち、締まる。ローム土を混じる。(鹿沼軽石層)
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性をもち、締まる。(ハードローム層)
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性をもち、締まりが強い。(ハードローム層)
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性をもち、締まりが強い。(ローム混じりの礫層)

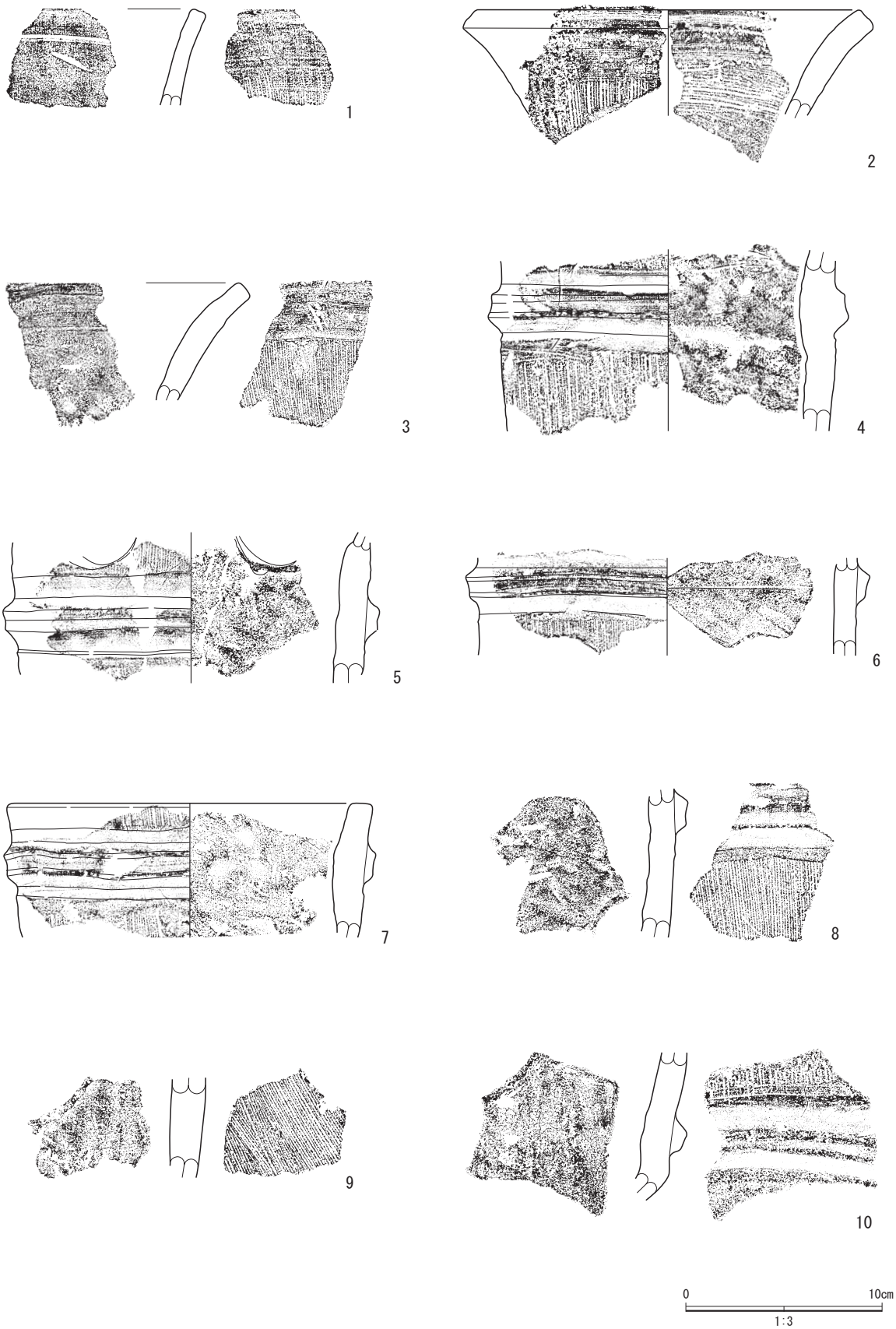


2号南側周溝トレンチ

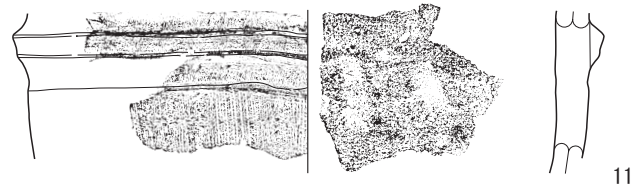
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。(9層と同)
- 2 10YR3/2 黒褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子・ロームブロックを微量含む。



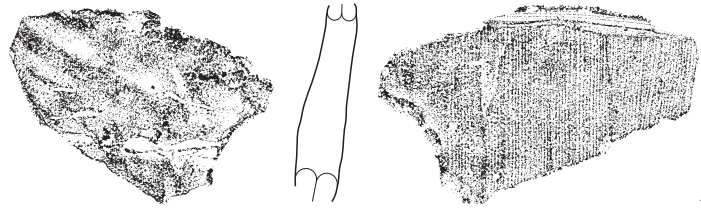
第7図 2号墳



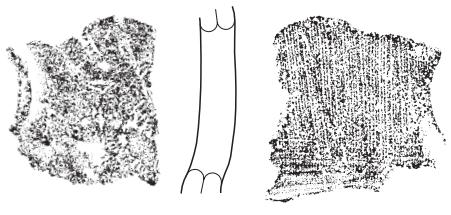
第8图 2号填出土遗物(1)



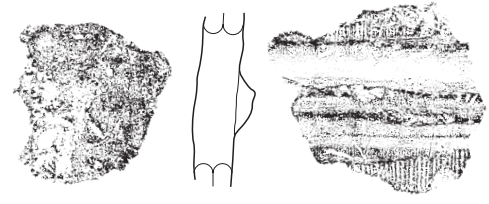
11



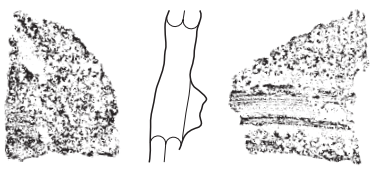
12



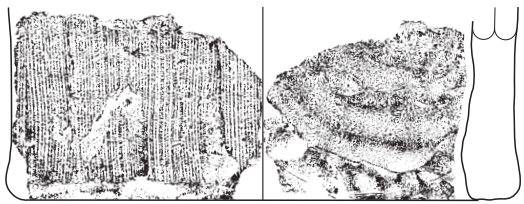
13



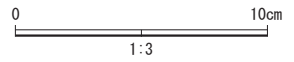
14



15



16



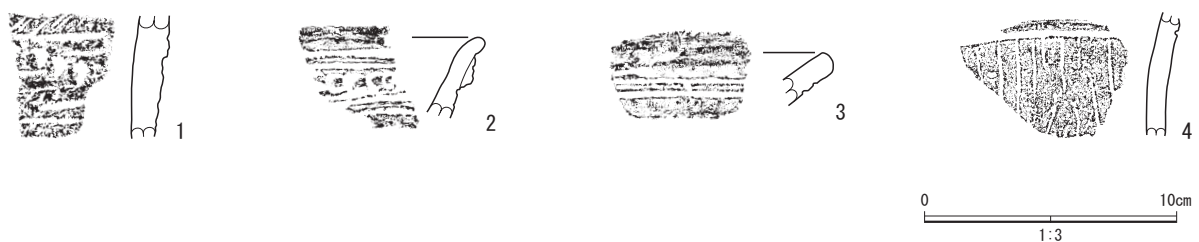
第9图 2号填出土遗物(2)

第3表 2号墳出土埴輪属性一覧

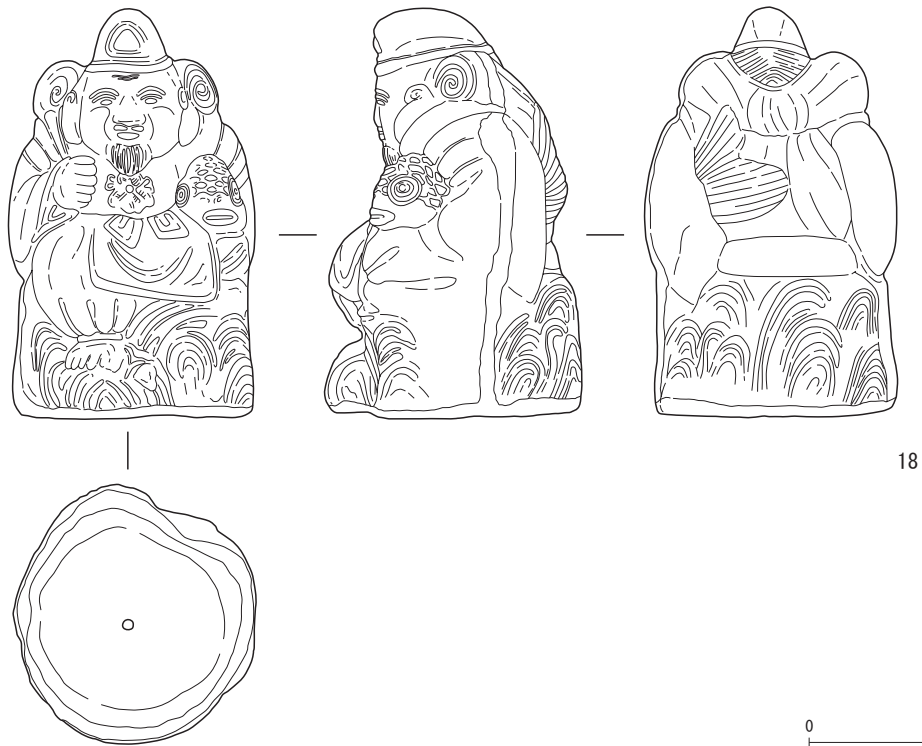
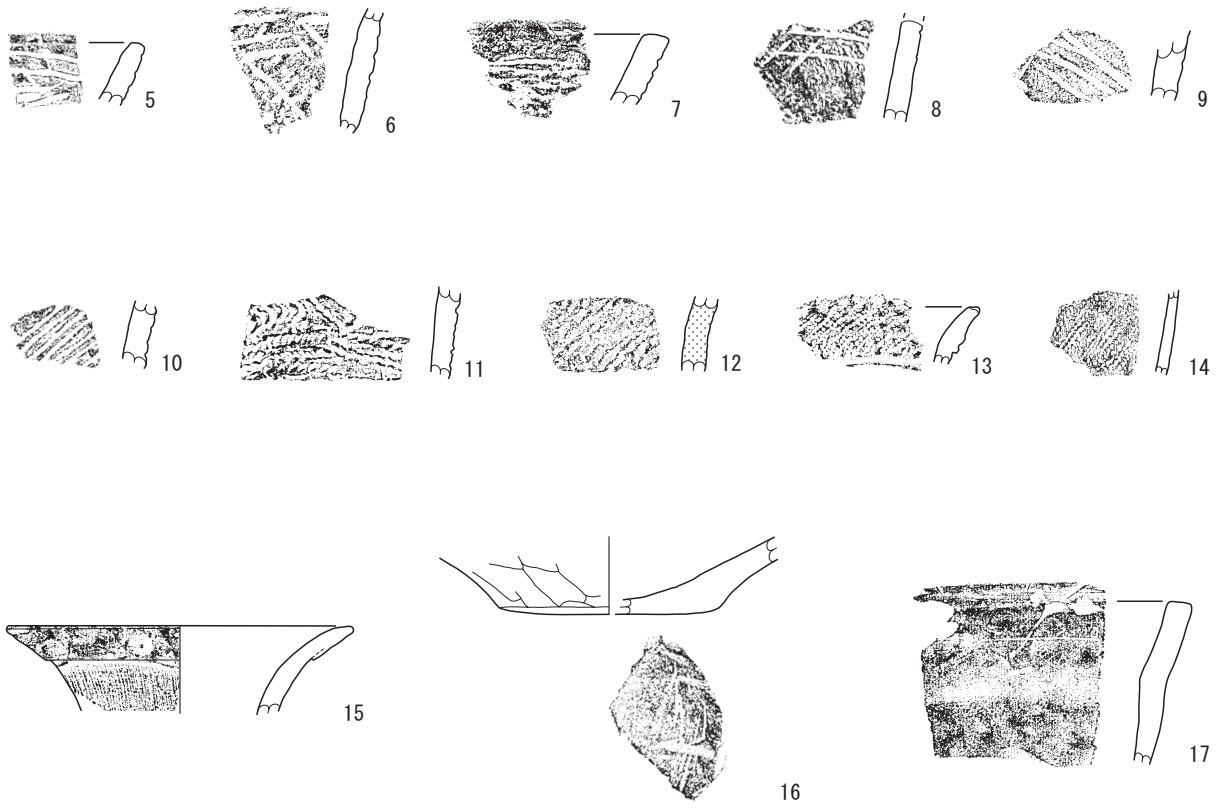
掲載番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率(%)	高さ(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	TM2- No.5	埴輪	円筒埴輪	口縁部	細片	(4.9)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・白色粒子	良好	外面 7.5YR7/4 にぶい橙 内面 7.5YR6/4 にぶい橙	
2	表土一括	埴輪	円筒埴輪	口縁部	細片	(5.4)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・赤褐色粒子	普通	内外面 7.5YR6/4 にぶい褐	
3	表土一括	埴輪	円筒埴輪	口縁部	細片	(6.0)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・長石・白色粒子・赤褐色粒子	良好	外面 5YR5/6 明赤褐 内面 5YR5/8 明赤褐	
4	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(9.3)	-	-	体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・白色粒子	普通	外面 7.5YR7/4 にぶい橙 内面 7.5YR6/4 にぶい橙	
5	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.7)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・白色粒子・赤褐色粒子	普通	外面 5YR7/4 にぶい橙 内面 5YR6/4 にぶい橙	
6	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(5.0)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・白色粒子・赤褐色粒子	良好	内外面 5YR6/6 橙	
7	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(6.9)	-	-	体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・長石・白色粒子・赤褐色粒子	普通	内外面 5YR6/6 橙	
8	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.6)	-	-	体部外面縦位ハケ、内面ナデ。円形とみられる透孔。	石英・角閃石・白色粒子・赤褐色粒子	普通	外面 5YR6/6 橙 内面 5YR7/4 にぶい橙	
9	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(5.1)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・白色粒子・赤褐色粒子	普通	内外面 5YR6/6 橙	
10	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.6)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部の器面剥離顕著。	石英・赤褐色粒子	普通	外面 5YR6/6 橙 内面 7.5YR6/6 橙	
11	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(6.5)	-	-	体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・長石・白色粒子・赤褐色粒子	普通	外面 5YR6/6 橙 内面 5YR5/6 明赤褐	
12	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.8)	-	-	口縁部直下を沈線と隆帯で区画、単節縄文 LR。	白色粒子・石英	良好	外面 10YR4/1 褐灰 内面 10YR5/1 褐灰	
13	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.4)	-	-	口縁部直下を沈線で区画、単節縄文 LR。	白色粒子・石英	普通	外面 7.5YR5/4 にぶい褐 内面 7.5YR5/1 褐灰	
14	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(7.0)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・白色粒子・赤褐色粒子	普通	内外面 5YR6/6 橙	
15	表土一括	埴輪	円筒埴輪	体部	細片	(6.0)	-	-	突帯あり。突帯部横位ナデ。体部の器面剥離顕著。	石英・赤褐色粒子	普通	外面 5YR6/6 橙 内面 7.5YR6/6 橙	
16	表土一括	埴輪	円筒埴輪	底部	細片	(7.7)	(19.1)	-	体部外面縦位ハケ、内面ナデ。	石英・長石・白色粒子・赤褐色粒子	普通	外面 5YR6/6 橙 内面 5YR5/6 明赤褐	

(2) 遺構外出土遺物 (第10・11図, 第4表, 図版5~7)

今回の調査では、古墳に伴わない時期のものとみられる遺物が少量だが出土している。そのうち 18 点を図示している。1~12は縄文土器で早期沈線文系の三戸式、前期浮島式や諸磯式、黒浜式が出土している。一部図示していないものに中期のものがみられた。1は早期沈線文系の三戸式ある。2~10は前期浮島式である。11は前期浮島式もしくは諸磯式であろう。12は胎土に繊維が混入する前期黒浜式である。13・14は弥生土器で後期前半のものとみられる。15・16は土師器で古墳時代前期から中期の範疇とみられる。17は中世の内耳鍋。18は近現代のものとみられる「エビス様」の土製人形で墳頂部の小さな高まりにあった可能性のある小祠に伴うものとみられる。(小久)



第10図 遺構外出土遺物(1)



第 11 图 遺構外出土遺物 (2)

第4表 遺構外出土土器属性一覧

掲載番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	地文無文。沈線文や刺突文が施される。	石英・白色粒子・砂粒子	普通	外面 5YR3/2 明赤褐 内面 5YR5/4 にぶい赤褐	縄文時代早期
2	表土一括	縄文土器	深鉢	口縁部	細片	—	—	—	地文無文。口縁部直下に半截竹管による連続刺突文とその上下に二本の平行沈線が横走する。内面ナデ。堅緻。	白色粒子・雲母	良好	外面 10YR7/3 にぶい黄橙 内面 10YR7/3 にぶい黄橙	縄文時代前期
3	表土一括	縄文土器	深鉢	口縁部	細片	—	—	—	口唇部緩い角頭状。地文無文。口縁部直下に半截竹管による二本の平行沈線が横走する。内面ナデ。堅緻。	石英・長石・白色粒子・赤褐色粒子	良好	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	縄文時代前期
4	TM2-No.1	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	地文無文。沈線が横走り区画され、縦位の捺糸文を施文。堅緻。	石英・雲母・白色粒子	良好	外面 7.5Y6/6 橙 内面 7.5Y4/1 褐灰	縄文時代前期
5	表土一括	縄文土器	深鉢	口縁部	細片	—	—	—	口唇部緩い角頭状。地文無文。口縁部直下に半截竹管による二本の平行沈線が施される。内面ナデ。	石英・白色粒子・赤褐色粒子	普通	内外面 5YR7/4 にぶい橙	縄文時代前期
6	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	器面の風化顕著。二本一組の沈線により区画される。地文には縄文が施されていたものとみられる。	石英・長石・白色粒子	普通	内外面 7.5YR6/6 橙	縄文時代前期
7	表土一括	縄文土器	深鉢	口縁部	細片	—	—	—	器面剥離顕著。口唇部緩い角頭状。地文無文。口縁部直下に半截竹管による連続刺突文が横走する。内面ナデ。	石英・長石・白色粒子	普通	外面 5YR4/2 灰褐 内面 5YR5/6 明赤褐	縄文時代前期
8	表土一括	縄文土器	深鉢	口縁部	細片	—	—	—	二本一組の沈線が横走り区画。貝殻腹線文が施される。内面ナデ。堅緻。	石英・長石・白色粒子	良好	内外面 10YR7/4 にぶい黄橙	縄文時代前期
9	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	地文無文。斜位の太い沈線が施される。	石英・長石・白色粒子・小礫	普通	内外面 10YR4/2 灰黄褐	縄文時代前期
10	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	地文無文。斜位の沈線が密に施される。堅緻。	石英・白色粒子	良好	外面 7.5YR6/6 橙 内面 5YR5/6 明赤褐	縄文時代前期
11	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	地文無文。半截竹管による細かな連続刺突文や爪形文がみられる。内面ナデ。堅緻。	石英・長石・雲母・赤褐色粒子	良好	外面 10YR3/1 黒褐 内面 10YR6/3 にぶい黄橙	縄文時代前期
12	表土一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	—	—	—	単節縄文 LR。	石英・白色粒子・繊維	普通	外面 10YR7/4 にぶい黄橙 内面 10YR7/2 にぶい黄橙	縄文時代前期
13	表土一括	弥生土器	甕	口縁部	細片	—	—	—	折り返し口縁。口縁部に附加条1種 LR+2R。口唇部及び折り返し口縁下端部に縄文を押圧。	石英・白色粒子	普通	内外面 7.5YR4/2 灰褐	弥生時代後期
14	表土一括	弥生土器	甕	胴部	細片	—	—	—	捺糸文 L を施文。	石英・白色粒子	良好	外面 7.5YR5/2 灰褐 内面 7.5Y6/4 にぶい橙	弥生時代後期
15	表土一括	土師器	甕	口縁部	細片	(13.6)	—	(3.5)	折り返し口縁。口縁部ナデ。以下縦位のハケ。内面横位ナデ。	石英・長石・赤褐色粒子	普通	外面 7.5YR7/4 にぶい橙 内面 7.5YR6/3 にぶい褐	古墳時代前～中期
16	表土一括	土師器	甕	胴部下端～底部	細片	—	(8.6)	(3.1)	内外面ナデ調整。底面端部にハケ調整。	石英・長石・砂粒子	普通	外面 10YR4/1 褐灰 内面 10YR7/4 にぶい黄橙	古墳時代前～中期
17	TM2-No.19	土器	内耳鍋	口縁部	細片	—	—	—	口唇部角頭状。頸部にくびれを持つ。内外面ナデ。	石英・長石・赤褐色粒子	普通	外面 10YR8/3 浅黄橙 内面 10YR7/4 にぶい黄橙	中世
18	表土一括	土製品	人形	—	完形	高さ 16.3	幅 9.7	厚さ 10.2	「エビス様」。器面には彩色が施されていたが剥がれてしまっている。底面に径 3mm ほどの焼成前穿孔。堅緻。	白色粒子	良好	内外面 10YR6/2 灰黄褐	近現代 470.0 g

第5表 遺物集計表

種別・器種	出土地点		墳丘	周溝	表土	攪乱	表探	計
	点数	重量						
埴輪	円筒埴輪	点数	23	0	60	101	10	194
		重量 (g)	966.3	0	2829.2	1675.5	438.5	5909.5
土師器	甕	点数	9	1	29	6	2	47
		重量 (g)	268	20.9	394.5	70.4	11.9	765.7
	壺 (埴)	点数	0	0	5	0	0	5
		重量 (g)	0	0	48.2	0	0	48.2
須恵器	甕	点数	0	0	0	0	2	2
		重量 (g)	0	0	0	0	286.5	286.5
縄文早期	深鉢	点数	0	0	1	0	0	1
		重量 (g)	0	0	11.0	0	0	11.0
縄文前期	深鉢	点数	0	0	12	2	0	14
		重量 (g)	0	0	258.3	11.8	0	270.1
縄文中期	深鉢	点数	0	0	1	0	0	1
		重量 (g)	0	0	4.8	0	0	4.8
弥生土器	甕	点数	0	0	2	0	0	2
		重量 (g)	0	0	18.3	0	0	18.3
中世土器	内耳鍋	点数	1	0	0	0	0	1
		重量 (g)	70.5	0	0	0	0	70.5
土製品	人形	点数	0	0	0	0	1	1
		重量 (g)	0	0	0	0	469.5	469.5
礫		点数	0	0	2	2	0	4
		重量 (g)	0	0	69.4	20	0	89.4
合計		点数	33	1	112	111	15	272
		重量 (g)	1304.8	20.9	3633.7	1777.7	1206.4	7943.5

第4章 総括

第1節 調査成果

第2号墳の墳丘の東側は削平により失われてしまったが、既往の調査で未確認であった周溝の存在が土層断面より明らかとなった。土層断面では南北両側で周溝が確認されている。地形測量から推定される周溝外径はおよそ24 m、周溝内径はおよそ20 mを測る。周溝からみた墳丘の現状の高さは3.5 m程に達する。周溝の規模は、上幅約2.3 m、下幅1.7 m前後、深さ0.5 m前後を測る。周溝出土遺物は混入したとみられる古墳時代前半の土師器甕の細片1点のみである。墳丘周辺や削平部からは古墳に伴う円筒埴輪片が194点、5909.5 gが出土し、今次調査の出土遺物の大半を占める。いずれも普通円筒埴輪の破片で、口縁部、体部、底部があり、突帯部や円形透孔がみられる。突帯は低平で台形に近い形状をしたものが多い。また厚手のものと薄手で堅緻なものが含まれる。破片資料のため形態が不明瞭であるが、口縁部が外反するものと外傾するものが含まれている。また黒斑がみられるものはなかった。(小久)

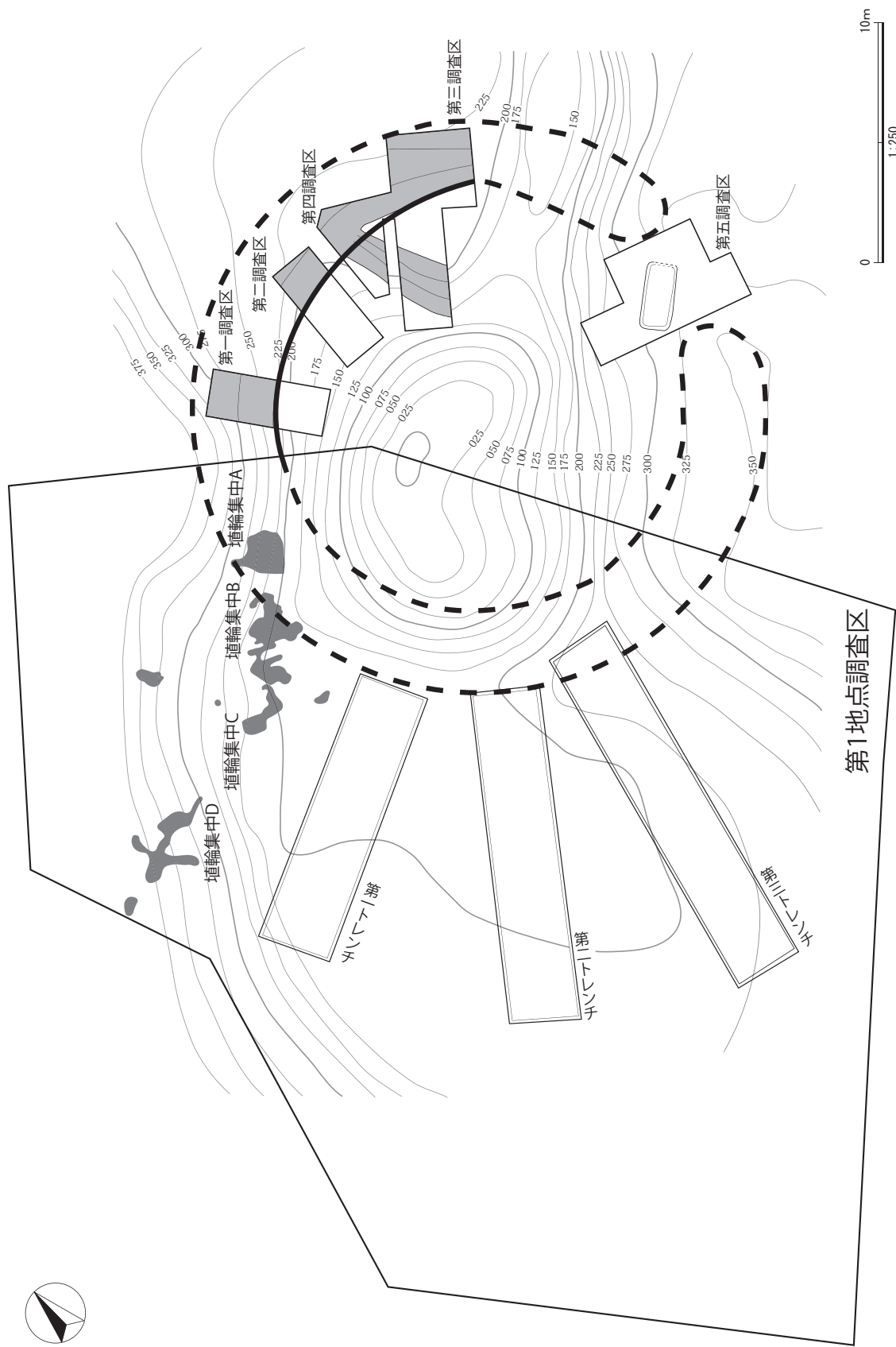
第2節 北屋敷古墳群第2号墳の墳形について

北屋敷古墳群第2号墳の墳形については、第1地点の本発掘調査報告書では「墳丘南西側の道路建設予定地を全面発掘したにもかかわらず、古墳に伴う周溝が未検出に終わり、最後まで墳形を明確にできなかった。このような事例は、通常古墳調査において極めて珍しいことである」(井上・千葉1995:64頁)とされ、調査終了後に墳形確定を目的として実施した周溝確認調査の報告書でも「円形なのか前方後円形を呈するのか、周溝調査からは明確にできず、未確認のまま次回の調査に委ねられた」(井上 1995:17頁)と報告された。当古墳の墳形について言及している論考は少ないが、当古墳から出土した人物埴輪の脚部を分析した日高 慎氏は、当古墳を直径20 mの円墳として理解されている(日高 1996・2013)。また、金山塚古墳の位置づけを再検討された井 博幸氏は、脚註において北屋敷古墳群第2号墳が東西に主軸をとる全長30 m以内の墳丘規模を有する前方後円墳であった可能性を示唆されている(井 2007)。

北屋敷古墳群第2号墳の築造年代については、出土している埴輪の技術的・形態的特徴から陶器編年のTK10頃に位置づけられ、6世紀前半～半ば頃と推定されている(黒澤 2010・稲村 2019)。

今般実施した第2次調査の結果、墳丘の東側において南北両側で周溝が円形状に検出され、第1地点の周溝確認調査の結果と併せて考えると円形に巡ることから第1地点の調査で確認されていた墳丘の形状は円形であったことが確実となった。円墳であったと仮定した場合の墳丘と周溝の推定ラインを復元したものが第12図で、円墳であった場合の墳丘規模は直径16.8 m、周溝外径直径23.8 m、周溝上面幅2.5～3.5 mとして復元することができる。直径20 m以下の円墳で埴輪が樹立されているものは当地域に普遍的に存在するのであろうか。第6表は水戸市域において確認されている埴輪を伴う円墳を集成したものであるが、愛宕山古墳群第7号墳、赤塚古墳群W9号墳・W10号墳・W13号墳、稻荷塚古墳群第2号墳、牛伏古墳群第7・16号墳、杉崎コロニー古墳群第17号墳(旧内原第88号墳)など直径20 m以下の円墳でも埴輪を伴う事例は幾つかあり、当地域では普遍的に存在すると言って差し支えない。

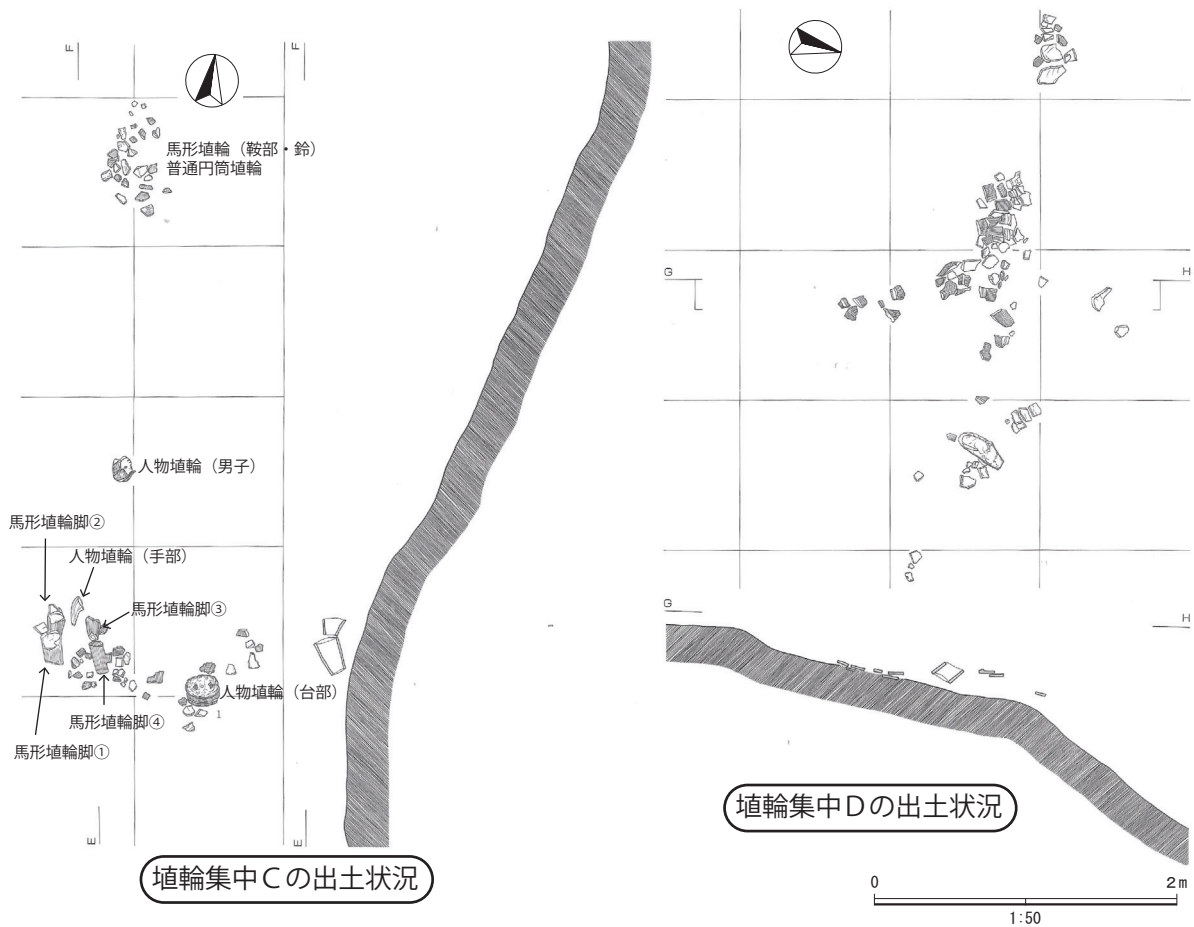
ただし、第12図のように円墳として復元した場合に問題になるのが、第1地点の調査(井上・千葉1995)で確認されている埴輪集中A～Dの出土状況(第13図)である。今一度埴輪集中の内容を再確



第12図 墳形の復元案①（円墳の場合）

第6表 水戸市域における埴輪を伴う円墳

古墳の名称	墳丘規模	築造時期	内部主体	埴輪の種類	文献
荷鞍坂1号墳	直径24m	6世紀前葉	—	普通円筒・形象(人物・鳥・馬)	(有山編2009)
富士山古墳群第2号墳	直径20m	6世紀	—	普通円筒・形象(家・馬)	(大森1952・1974, 川口2010)
西原古墳群第6号墳	外形27m, 内径24m	6世紀	—	普通円筒・朝顔形円筒	(川口・渥美編2007)
愛宕山古墳群第4号墳(狐塚古墳)	—	6世紀カ	—	普通円筒・形象(人物・器財)	(井上・蓼沼ほか1999, 川口2010)
愛宕山古墳群第5号墳	外径26m, 内径20m	6世紀前葉	—	普通円筒	(根本2016)
愛宕山古墳群第6号墳	—	6世紀前葉	—	普通円筒	(根本2016)
愛宕山古墳群第7号墳	外形20m, 内径16m	6世紀中葉	—	普通円筒・朝顔形円筒・形象(人物)	(根本2016)
赤塚古墳群E2号墳	直径20m×高さ1m	6世紀	—	普通円筒	(伊東1974, 川口2010)
赤塚古墳群E4号墳	直径30m	6世紀	—	普通円筒・形象(人物〈壺を頭上に乗せた女性〉・馬)	(伊東1974, 川口2010)
赤塚古墳群W9号墳	直径18m×高さ1m	6世紀	—	普通円筒	(伊東1974, 川口2010)
赤塚古墳群W10号墳	直径12m	6世紀	—	普通円筒	(伊東1974, 川口2010)
赤塚古墳群W13号墳	直径14m	6世紀	—	普通円筒	(伊東1974, 川口2010)
稲荷塚古墳群第2号墳	直径18m×高さ2.5m	6世紀中葉	—	普通円筒	(成島・西川ほか2019)
千波山古墳群第1号墳	直径20m×高さ2m	6世紀	—	普通円筒	(井上・蓼沼ほか1999, 川口2010)
六地藏寺古墳	直径30m×高さ2.5m	6世紀	—	普通円筒	(井上・蓼沼ほか1999, 川口2010)
フジヤマ古墳	直径21m×高さ3.6m	6世紀後葉	横穴式石室	普通円筒・形象(馬)	(井上・蓼沼ほか1999, 川口2010)
牛伏古墳群第16号墳	直径15m×高さ約2m	5世紀後葉	—	普通円筒・朝顔形円筒・形象(馬)	(井・小宮山1999, 田中2010)
牛伏古墳群第7号墳	直径18m×高さ約1.5m	6世紀初頭	—	普通円筒	(井・小宮山1999, 田中2010)
杉崎古墳群第20号墳	直径約20m×高さ4.5m	6世紀後葉	—	普通円筒	(井・小宮山1999, 田中2010)
杉崎古墳群第40号墳	直径25～30m×高さ約3m	5世紀末	—	普通円筒・形象	(井・小宮山1999, 田中2010)
杉崎コロニー古墳群第17号墳(旧内原第88号墳)	直径18～20m×高さ約1.5m	6世紀後葉	木棺直葬	普通円筒・朝顔形円筒・形象(人物・鶏)	(井・小宮山1999, 井・市毛1980, 田中2010)
大塚古墳群第3号墳	直径20～25m×高さ1m	6世紀前葉	—	普通円筒	(井・小宮山1999, 田中2010)
舟塚古墳群第2号墳	直径28m	6世紀中葉	—	普通円筒埴輪	(井・小宮山1999, 田中2010)



第13図 北屋敷古墳群第2号墳の埴輪集中A～Dの出土状況

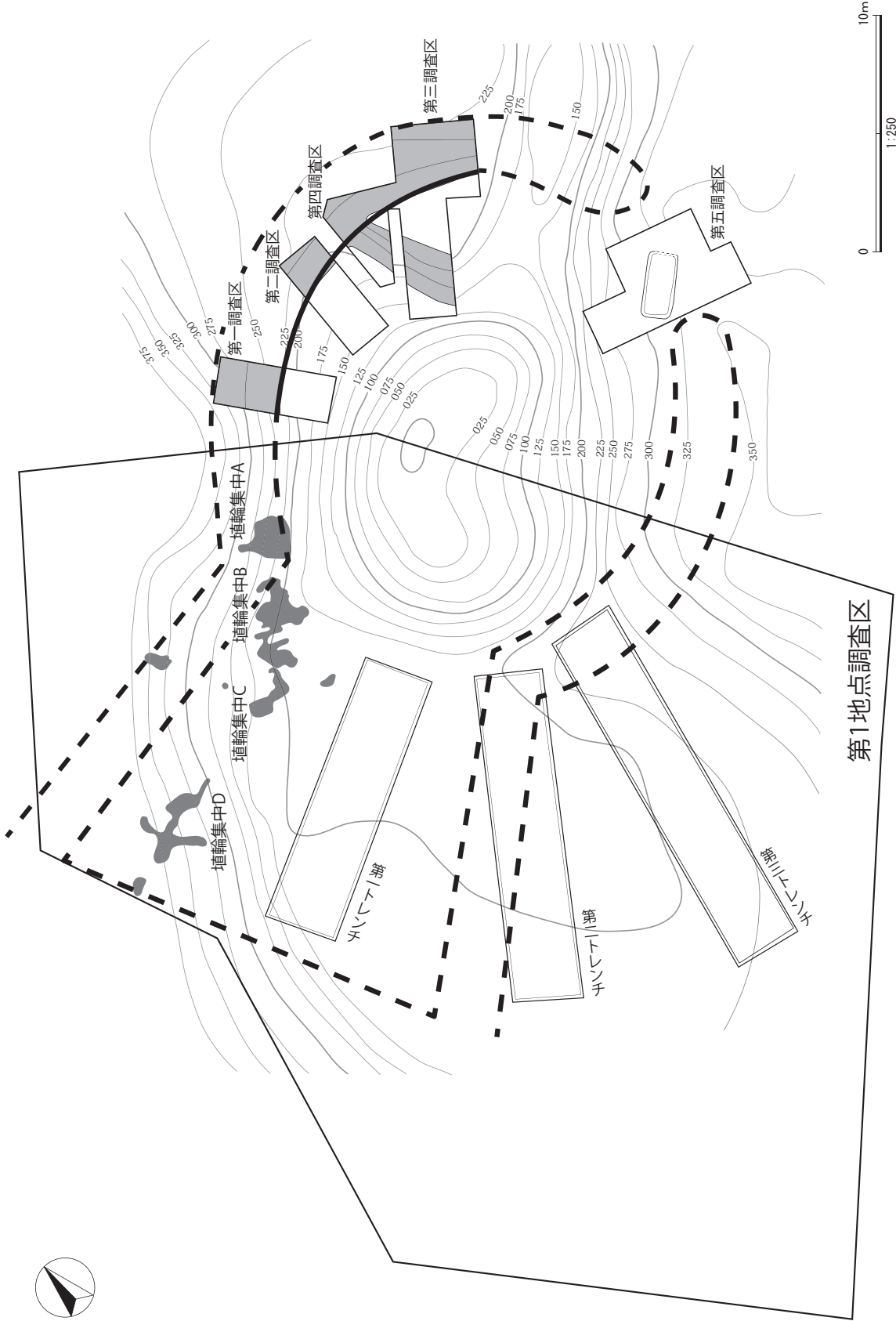
認しておこう。

埴輪集中Aは円筒埴輪が折り重なる状態で出土した集中部で、円筒埴輪の基底部～体部が50°～70°の角度で傾いた状態で検出されている。この状態から基底部は原位置を保っていると理解される。埴輪集中Bは形象埴輪が多く出土した集中部で、分離造形による人物埴輪の半身像を載せる台部2点が原位置の状態を保っていたほか、男子と女子の頭部・胴部・腕部・手部や衝角付兜を被り灰色系顔料により彩色された挂甲を着た武人埴輪が倒れた状態で出土している。埴輪集中Cは人物埴輪の基部や馬形埴輪の脚部2本が20°の角度で傾いた状態で検出されているほか、その周囲から人物の胴部、腕部、普通円筒埴輪の破片が出土している。また、北側からは離れて男子の頭部や馬形埴輪の鞍部や鈴、普通円筒埴輪の破片がまとめて出土しており、上方から転落したものと理解されている。この状態から人物埴輪の基部と馬形埴輪の脚部については原位置を保っていると理解される。埴輪集中Dは大部分が普通円筒埴輪の破片で、馬の脚部（埴輪集中Cの脚部とは別個体）の破損品が検出されている。普通円筒埴輪については基底部を残す4本のうち一部を除き原位置から遊離して破損しているように見受けられると報告されている（井上・千葉前掲）。

以上が埴輪集中A～Dの出土状況の概略であるが、埴輪集中A～Dの大部分の埴輪については原位置を保った状態で列を形成していると理解される。そうすると、円墳として復元した第12図の案だと原位置を保った埴輪列が周溝内やさらには周溝の外周部よりも外側に並ぶことになってしまい、円墳案は成立が難しくなってしまうのである。

この埴輪の出土状況について井 博幸氏は北屋敷古墳群第2号墳の墳形を特定するヒントが見いだせると指摘する（井前掲）。井氏は「これらの埴輪群は個体ごとにまとまる比較的良好な出土状況で、後世に攪乱を受けた形跡はなく、墳頂側からの土圧をうけ、墳端部に向かって傾斜した状況が看取される。とくに、ほぼ総ての個体の基底部の位置が面的・高度的に揃っていることは、これらの埴輪群が本来の樹立位置から大きく動いていないことを示している。さらに重要な点は、全体の遺物分布がC・Bブロックを中心に「く」の字状に折れ曲がり、個々の埴輪も墳頂の傾斜に沿って微妙に方向を違えながら遺存する点にある（井上1995：図版12参照）。これはBブロックの西端・Cブロックの東端付近に、くびれ部に相当する屈曲が存在したことを明示している、と考えるのが自然であろう。」（井前掲：78頁）という極めて重要な指摘を行っている。さらに井氏は「墳丘中段の北側、この屈曲部を中心に西から東に向かって、円筒4本→馬・馬→女子・女子→男子→男子（武人）→女子/男子→円筒4本の樹立状態が推測されている（前掲書：30）。これは、墳丘北側の中段に、前方部から後円部にかかる付近に形象埴輪群を樹立した石岡市（旧八郷町）丸山4号墳（後藤・大塚 1957）、千葉県姫塚・殿塚古墳（橋本 1980）などと共通する配列状態である。また、墳丘の北側を強く意識した配列形態などは牛伏4号墳（井ほか 1999）にも共通する特徴であり、初現的な北面重視の事例として注目される。以上から、北屋敷2号墳はほぼ東西に主軸をとる前方後円墳であったと判断されるのである。そして、現状の墳丘規模（径16m前後）から考え、金山塚古墳とほぼ等しい全長30m以内の墳丘規模を有していたのではないかと想定したい」（井前掲：78頁）と当古墳が前方後円墳であった可能性が高いこと、その主軸方位や規模についても具体的に言及されている。

第1地点の調査では墳丘の北西側に形象埴輪が集中して出土しているのに対し、その後実施された周溝確認調査では、第五調査区を除く全ての調査区で形象埴輪は1点も検出されず、全て円筒埴輪（朝顔形円筒埴輪1点を含む）であった（井上 1995）。特に第三・四調査区の周溝内側の上場付近に50～70cmの間隔で列状に6基並んで検出された直径20～30cmほどのピットは、1基の内部に円筒埴輪



第14図 墳形の復元案②（前方後円墳の場合）

の基底部が傾いた状態で出土しており、この出土状況からこれらのピットは円筒埴輪を樹立する際に構築されたものと理解される。このような形象埴輪群の偏在的分布も墳丘の東側が後円部であった可能性を示唆するのではないか。

井氏の論文は金山塚古墳の位置づけについて論じたものであるため、北屋敷古墳群第2号墳の墳形復元図は示されていないが¹⁾、井氏の指摘に基づき第2号墳が前方後円墳であったと仮定した場合の墳丘と周溝の推定ラインを復元してみた(第14図)。第1地点の調査時には前方部らしき高まりや地形上の痕跡は確認されておらず、周溝も確認されていないため、想定の域を出ないことは重々承知しているが、全長32.5m、後円部径17.5～18.5m、後円部周辺の周溝上面幅2.5～3.0m、くびれ部幅9.5m、くびれ部付近の周溝上面幅2.5m、前方部長15m、前方部幅17m、前方部付近の周溝上面幅2.5mで、西に前方部を向ける形²⁾で大胆に復元してみた³⁾。周溝確認調査で検出された周溝の内径の湾曲が少しくつく、埴輪集中Aで検出された円筒埴輪4本の基底部付近を連結すると後円部径は真円に復元することが難しいなど、やや歪な点は否めないが、先行研究でも指摘されているように墳形を前方後円墳として復元する案の方が埴輪の出土状況や周溝の形状などの面で矛盾が少ないように思う。

(川口)

註

- 1) 井氏の論文に北屋敷古墳群第2号墳の詳細な墳丘復元図は図示されていないが、56頁に掲載されている第1図金山塚古墳周辺の地形と古墳分布図(1/5000)には北屋敷古墳群第2号墳が西に前方部を向ける前方後円墳として示されている(井 2007)。
- 2) 第1地点の調査時に作成された墳丘測量図の等高線を詳細に観察すると、墳丘から東側へと等高線が直線状に13mほど伸びており、この部分はあたかも前方後円墳の前方部のようにも見える。ところがこの部分を前方部として理解すると原位置を保っている埴輪列との整合性が取れない。また、この部分を前方部とした場合、後円部の墳頂部に比して前方部の墳頂部が1.5mも低くなってしまふなど、後期古墳というよりは前期古墳の墳形の特徴に近くなってしまい、古墳の年代観との矛盾が生じてしまう。この部分は尾根状の自然地形と理解すれば問題はない。なお、墳形は異なるが直径20m以下の円墳の事例として取り上げた荷鞍坂1号墳にも11mほど周溝が途切れている陸橋が認められ、杉崎コロニー古墳群第88号墳でも北屋敷古墳群第2号墳と同様に陸橋中央部に墓坑の可能性のある長さ1.9m×幅0.8～0.9m×深さ0.5～0.7mの長方形の土坑が検出されている(井・市毛 1980)。
- 3) 井上義安氏による第1地点の本発掘調査時に作成された地形測量図と発掘調査区の平面図は、国土座標系上に載せたものではないため、今次調査の成果と図上で合成することが困難であった。従って、復元案に示した墳丘規模の数值は今次調査により得られた第6図の推定周溝ラインから復元される後円部径や周溝の内径・外径と若干の齟齬があるが、既に失われた地形も含めた全体像を示す事に主眼に置きあえて第1地点の調査時に作成された地形測量図と発掘調査区の平面図に基づき墳丘復元案を示したことをお断りしておく。

【引用・参考文献】

- 有山径世編 2009 『荷鞍坂遺跡（第1地点） コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
水戸市教育委員会
- 井 博幸 2007 「水戸市金山塚古墳の位置づけをめぐって」『国史館考古学』第3号 国史館大学考古学会
- 井 博幸・市毛 勲 1980 『茨城県内原町 杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所
- 井 博幸・小宮山達夫 1999 「第7章 内原町周辺の主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』内原町教育委員会
- 伊東重敏 1974 「I 解説 2 主要遺跡 3 赤塚古墳群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』
- 稲村 繁 2019 「附章 戸ノ内古墳出土の埴輪について」『戸ノ内遺跡・戸ノ内古墳発掘調査報告書』
東海村教育委員会
- 井上義安・蓼沼香未由ほか 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳 市道常澄6-0008号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安 1995 『水戸市北屋敷古墳』茨城県水戸市
- 大村冬樹 2012 「人物埴輪の製作技法からみた古墳時代後期の常陸」『筑波大学先史学・考古学研究』第23号
筑波大学歴史人類学系
- 大森信英 1952 「飯富村大字藤井・清水上古墳」『茨城高等学校史学部紀要』第1号 茨城高等学校史学部
- 大森信英 1974 「富士山古墳群」『茨城県史料 考古史料編 古墳時代』茨城県
- 川口武彦 2010 「水戸市旧水戸市域の古墳群」『シンポジウム 常陸の古墳群』六一書房
- 川口武彦・渥美賢吾編 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 梶山雅彦 1993 「第10章 北屋敷遺跡」『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
中ノ割遺跡 小山遺跡 諏訪前遺跡 高原古墳群 沢幡遺跡 高原遺跡 北屋敷遺跡』
財団法人 茨城県教育財団
- 黒澤彰哉 2010 「腕の製作技法と顔の作風から見た茨城の人物埴輪」『茨城県立歴史館報』第37号
茨城県立歴史館
- 田中 裕 2010 「水戸市旧内原町域における古墳の群構成」『シンポジウム 常陸の古墳群』六一書房
- 成島一也・西川忠春ほか 2019 『稲荷塚古墳群（第1地点第4次） 公共下水道工事（桜川処理分区枝線4-1工区）に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 根本康弘 2016 『愛宕山古墳群 旧水戸生涯学習センター解体撤去事業地内埋蔵文化財調査報告書』
茨城県教育委員会・公益財団法人茨城県教育財団
- 日高 慎 1996 「人物埴輪の地域性—双脚人物像の脚部の検討—」『考古学雑誌 西野元先生退官記念論文集』
西野元先生退官記念会
- 日高 慎 2013 「人物埴輪の地域性—双脚人物像の脚部の検討—」『東国古墳時代の埴輪生産組織の研究』
雄山閣

写真図版



2号墳土層断面 A-A' 東から



2号墳土層断面 A-A' 南から



2号墳土層断面 A-A' 北から



2号墳 墳丘中央部土層断面 東から



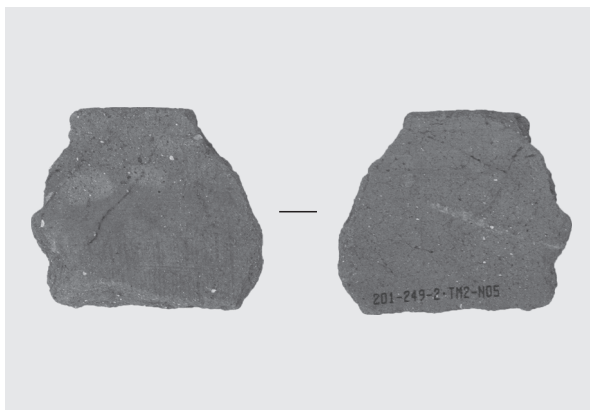
2号墳 北側周溝土層断面 東から



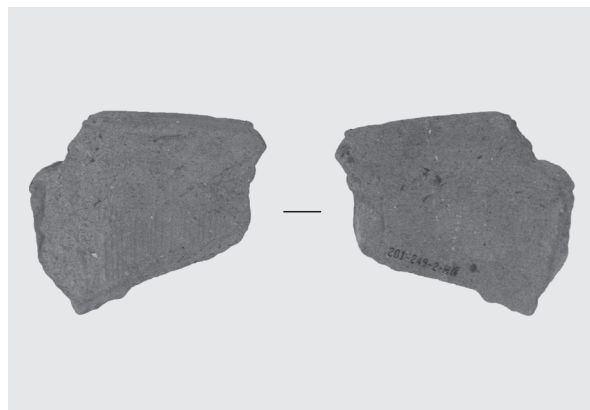
2号墳 南側周溝土層断面 東から



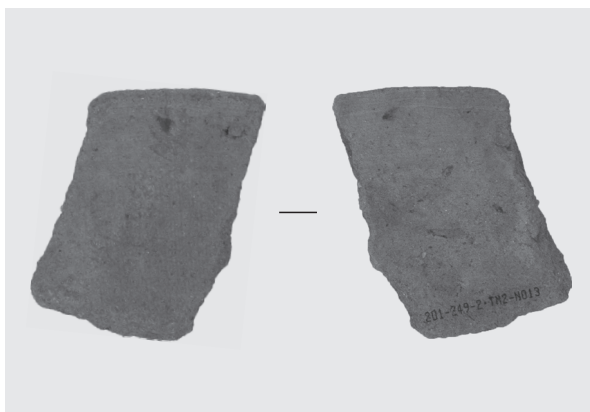
削平部南側残存周溝トレンチ土層断面 B-B' 東から



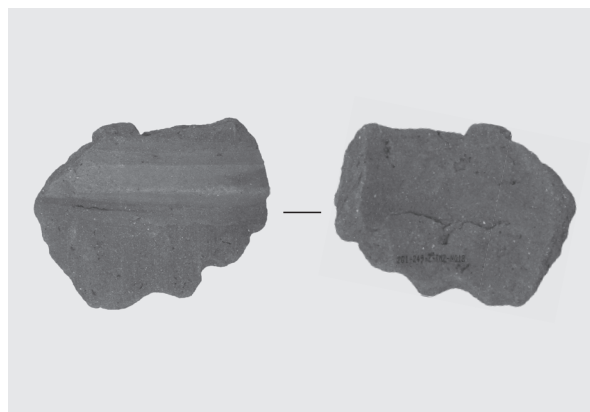
2号墳出土遺物 1



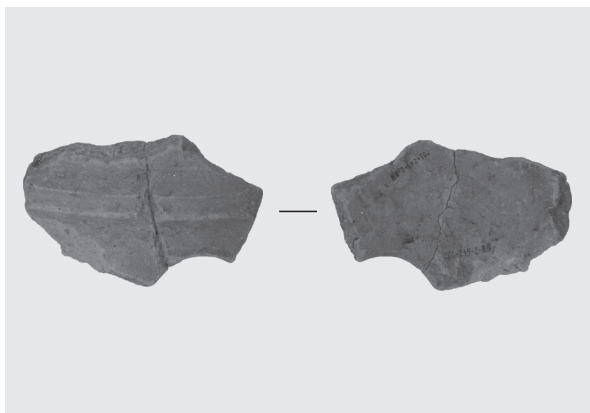
2号墳出土遺物 2



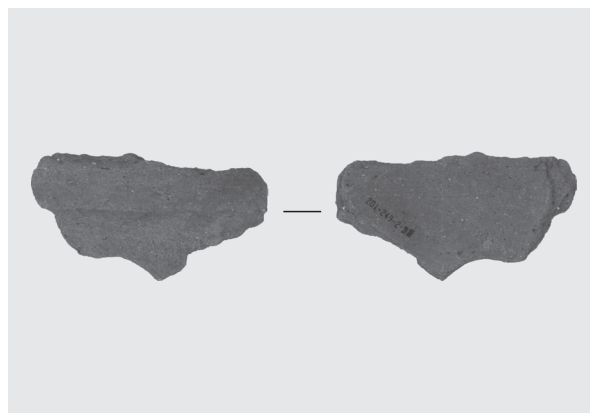
2号墳出土遺物 3



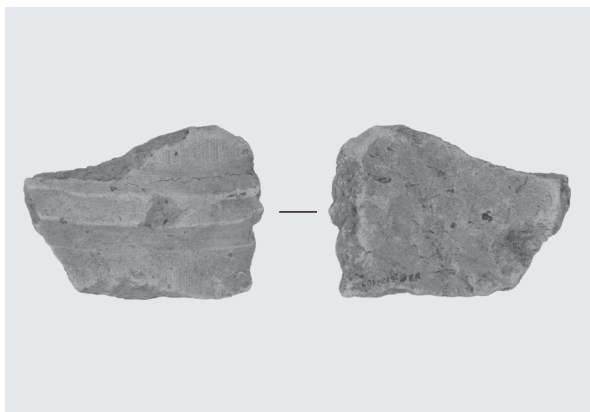
2号墳出土遺物 4



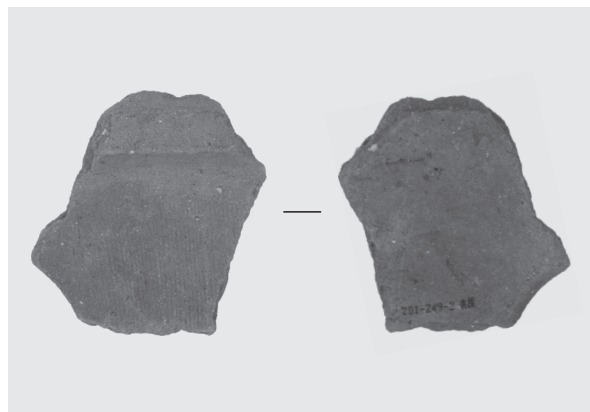
2号墳出土遺物 5



2号墳出土遺物 6

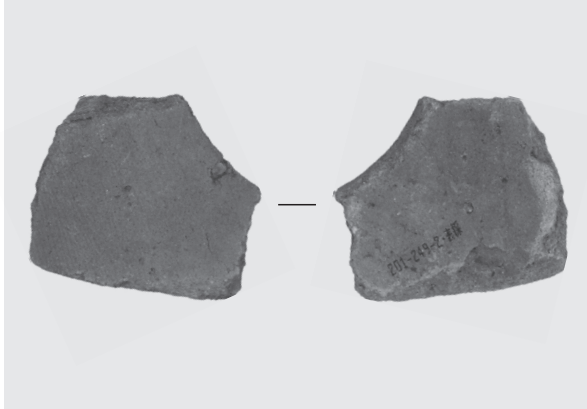


2号墳出土遺物 7

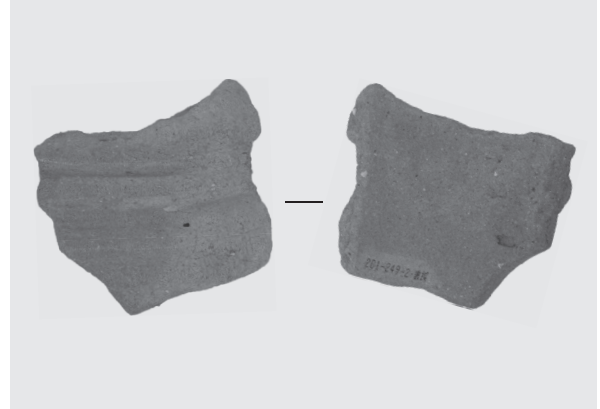


2号墳出土遺物 8

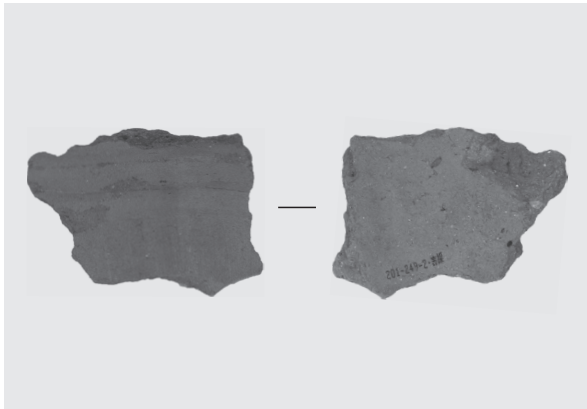
图版 4



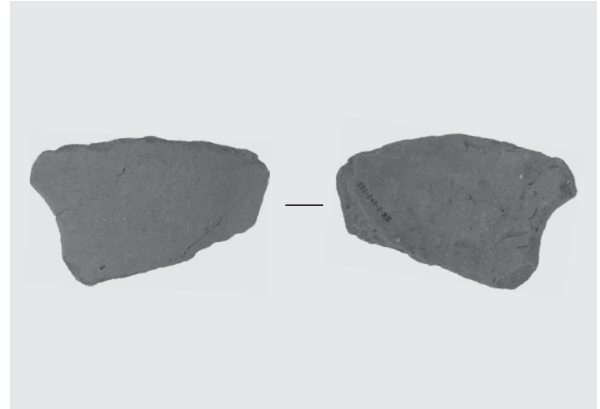
2号墳出土遺物 9



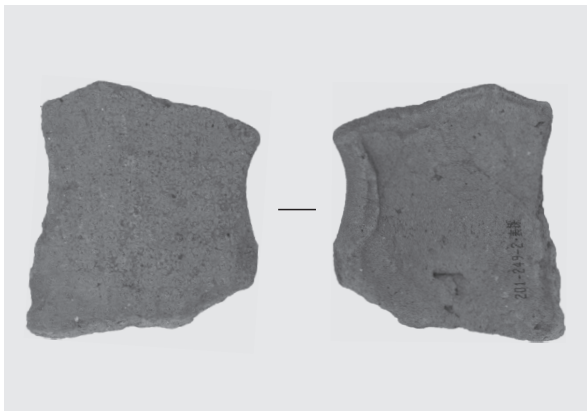
2号墳出土遺物 10



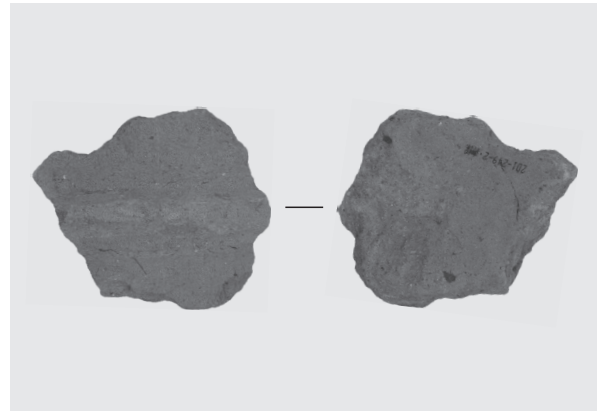
2号墳出土遺物 11



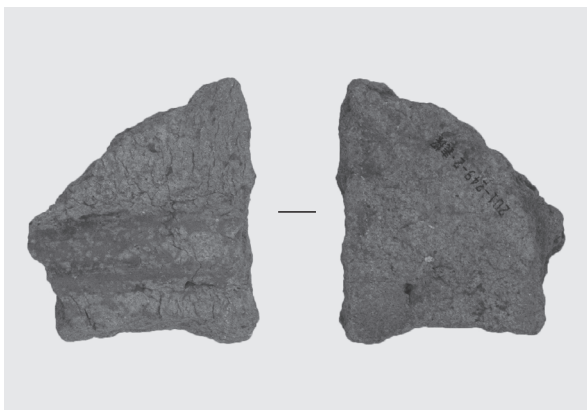
2号墳出土遺物 12



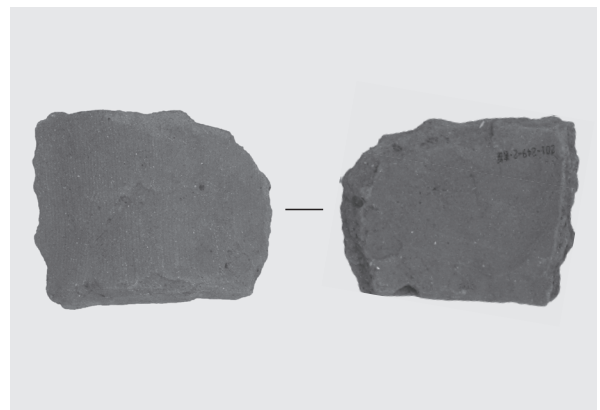
2号墳出土遺物 13



2号墳出土遺物 14



2号墳出土遺物 15



2号墳出土遺物 16



遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3



遺構外出土遺物 4



遺構外出土遺物 5



遺構外出土遺物 6



遺構外出土遺物 7



遺構外出土遺物 8



遺構外出土遺物 9



遺構外出土遺物 10



遺構外出土遺物 11



遺構外出土遺物 12



遺構外出土遺物 13



遺構外出土遺物 14



遺構外出土遺物 15



遺構外出土遺物 16



遺構外出土遺物 17



遺構外出土遺物 18

報告書抄録

ふりがな	きたのやしきこふんぐんだいにてんだいにじ							
書名	北屋敷古墳群（第2地点第2次）							
副書名	車両置き場造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第131集							
編集者名	小久頭治 金川真也 對馬むつみ							
著者名	小久頭治 金川真也 對馬むつみ 川口武彦							
編集機関	株式会社ラクロ 〒350-0021 埼玉県川越市大中居95番地3 ☎049-293-7474							
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号 ☎029-224-1111							
発行年月日	2022（令和4）年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのやしきこふんぐん 北屋敷古墳群	いばらきけん みとし 茨城県水戸市 おおくしちょうあぎきたのや 大串町字北ノ屋 敷744-1	201	249	36° 20' 01"	140° 32' 27"	2022. 9. 26 ～ 2022. 9. 30	約455 m ²	車両置き場
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北屋敷古墳群	古墳	縄文時代	—		縄文土器（早期～中期）			
		弥生時代	—		弥生土器（後期）			
		古墳時代	古墳		円筒埴輪， 土師器（前期～中期）			
		中世	—		土器（内耳鍋）			
		近現代	—		土製品（土人形）			
要約	今回の調査では、これまで未検出であった2号墳の周溝を土層断面でのみではあるが東側にて確認した。また、古墳に伴うものとみられる円筒埴輪が破片資料ではあるが多く出土している。							
項目	遺物の取り扱い							
水洗い	・すべて行った。							
注記	・機械と手書きを併用した。							
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。							
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてののみ作成した。							
台帳	・遺物台帳，図面台帳，写真台帳があり，検索が可能なように作成した。合計1冊（綴り）							
遺物保管方法	・出土遺物は，報告書使用と未使用に分け，収納箱に収めた。各箱には収納内容を明記した。なお，未使用分については種別毎に分類，収納した。							

水戸市埋蔵文化財調査報告 第131集

北屋敷古墳群（第2地点第2次）

—車両置き場造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和4年12月26日発行

発行／水戸市教育委員会
株式会社ラクロ

印刷／関東図書株式会社